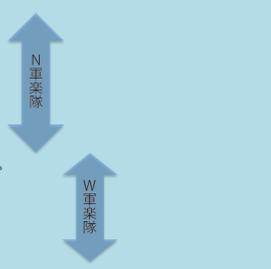


# フランツ・エッケルト没後 100 周年記念特別展

## 近代アジアの音楽指導者エッケルト

### プロイセンの山奥から東京・ソウルへ

年代	年令	エッケルトの出来事	家族・周辺	歴史的出来事
プ ロ イ セ ン	1852-4	0		
	1852-7	0	妻マチルデ・フーフ誕生。	
	1862	10		「ドイツ合唱連盟」「シレジア合唱連盟」創立。
	1864	12		第二次デンマーク戦争。
	1866	14		普墺戦争。
	1867	15	エッケルトの母死去。	
	1868	16		明治維新。フエントン所属の英国陸軍第10連隊来日。
	1869	17		ヴィルヘルムスハーフェン開港。
	1869-?	17	ナイセで補助楽隊員として勤務開始。	
	c.1869-10	17		フエントンが薩摩藩士32名に軍楽伝習開始。
日 本	1870-7	18		普仏戦争勃発。
	1871-10	19		陸・海軍楽隊が分立発足。
	1872-5	20		フエントンは海軍省雇教師として海兵隊所属の軍楽隊と鼓隊を指導。
	1875-10	23		ダグロンが教導団所属の陸軍楽隊の指導開始。
	1875-11	23		江華島事件勃発。
	1876-?	24	マチルデと結婚。	
	1876-4	24		フエントンは海軍省と式部寮(のちの宮内省式部職)の共雇となる。
	1876-8	24		海兵隊廃止により海軍楽隊は軍務局所轄となる。
	1876-12	24	長女誕生。	
	1877-3	24		フエントン満期解雇。
日 本	1878-9	26	娘誕生(幼少期に死亡か?)。	
	1879-1	26	日本勤務のためにハンブルクから出港。	
	1879-3	26	横浜に到着。海軍楽隊の指導を開始。	
	1879-9	27		
	1879-10	27	長男ドイツで誕生。	
	1880-3以前	27	東京合唱協会結成。	文部省音楽取調掛(のちの東京音楽学校)設置。伊澤修二が長となる。
	1880-3	27		メーソン来日。文部省音楽取調掛ほかで教育開始。
	1880-10	28	式部寮伶人の作曲した《君が代》の旋律を選択し、吹奏用に編曲。	
	1880-11	28	天長節宴会で式部寮伶人が《君が代》を初演(於赤坂仮居)。	
	1881	28	日本の音楽の研究結果を「JAPANISCHE LIEDER」として発表。	
日 本	1881-1	28	エッケルトの雇を求め上申書が、海軍卿榎本武揚に提出される。	
	1881-3	28	エッケルトが《君が代》について的小論をOAGIに発表。	
	1881-11	29		ケルネル来日。駒場農学校で講義開始。
	c.1882	30		妻、長女、長男が横浜に到着。
	1882-5	30		米朝修好通商条約締結。
	1882-7	30		ソウルで壬午事変勃発。
	1882-8-9	30	妻子他と伊香保旅行。	
	1883-2	30	文部省音楽取調掛を兼務(週4時間)。	
	1883-5	31		次女誕生。
	1883-11	31		鹿鳴館開館。
日 本	1883-12	31	日本政府より勲六等旭日章を受ける。	
	1884-8	32		
	1884-10	32		ルルーが陸軍楽隊の教育を開始。
	1885	33		
	1886-2	33		
	1886-3	33	文部省音楽取調掛業務を終了。	
	1886-4	33		
	1887-3	34		ソーヴレーが文部省に雇入。音楽取調掛に勤める。
	1887-4	35	宮内省式部職との兼任契約を結ぶ。	伊澤修二、エッケルト他で「日本音楽会」発足。
	1887-9	35		
日 本	1888-1	35	宮廷プロイセン音楽監督の称号を授与。	
	1888	36	『大日本礼式』(君が代)を出版。	
	1888-11	36		ディットリヒが東京音楽学校教師として指導開始。
	1889-2	36		大日本帝国憲法公布。
	1889-3	36	海軍楽隊教師満期解雇。	
	1889-4	37	宮内省式部職の専任教師として月額250円で正式に雇用される。	
	1890-4	38	陸軍戸山学校軍楽基本隊に嘱託教師として兼務。	海軍楽隊にアルベ着任。
	1891-8	39	近衛軍楽隊にも嘱託教師として兼務。	
	1892-7	40	近衛軍楽隊の兼務を終了。	
	1893-8	41		
日 本	1894-3	41	陸軍戸山学校軍楽基本隊(軍楽学舎)の兼務を終了。	『祝日大祭日唱歌』8曲を公布(《君が代》ふくむ)。
	1894-7	42		
	1895-10	43		日清戦争勃発。
	1895-11	43	海軍省が再度エッケルトを雇入れ(横須賀海兵団勤務、宮内省と共雇)。	ソウルで乙未事変勃発。
	1897-1	44	英照皇太后の大喪の礼に際し、葬送行進曲《哀の極》の作曲を依頼される。	
	1897-10	45		李氏朝鮮が、国名を大韓帝國と改称。
	1899-3	46	宮内省式部職および海軍省をともに満期解雇。	
	1899-4	47	家族とともに横浜出港のドイツ船籍でハンブルクへ出発。	
	1899-7	47	プロイセンより勲四等を受ける。	
	1899-9	47	日本政府より勲五等旭日章を受ける。	
日 本	1899-12	47	バート・ゾーデンの市議会が楽隊へのエッケルトの採用を決定。	
	1900-5	48	バート・ゾーデン保養地楽隊の指揮者として活動開始。	
	1900-9	48	バート・ゾーデンでの活動終了。	
	1900-10	48	ベルリン訪問。	
	1900-12	48	韓国に向けてハンブルクから出港。吉本光蔵がベルリンで見送る。	
	1901-2	48	ソウルに到着。	
	1901-4	49		兄ヴェンツェル死去。
	1901-5	49	侍衛連隊軍楽隊への指導開始。	
	1901-9	49	高宗皇帝誕生日に、エッケルト率いる新軍楽隊が初の御前演奏。	
	1902-1	49	高宗皇帝が国歌作曲を命じる。	
日 本	1902-8	50	エッケルト作曲、文官作詞の大韓帝國愛国歌を正式に制定公布。	
	1902-12	50	韓国政府より第三等大勳章を受ける。	
	1904-2	51		日露戦争勃発。
	1904-8	52		第一次日韓協約締結。
	1904-12	52		
	1905-2	52		第二次日韓協約締結。
	1905-11	53		龍山に朝鮮駐劄軍楽隊設置。
	1906	54		第三次日韓協約締結。軍隊の解散。
	1907-7	55		
	1907-9	55	軍楽隊は「帝室音楽隊」として存続。	
日 本	1907-12	55	一部の軍楽隊員のみ1907年12月に掌礼院掌楽課に吸収。	
	1907-12	55		
	1910-6	58	韓国皇室と雇継契約を結ぶ。	
	1910-8	58	楽隊を李王廟に委嘱、李王職洋楽隊となる。45人編成に縮小。	
	1914	62		第一次世界大戦勃発。
	1915-12	63	健康上の理由で、軍楽隊指揮権を白馬鎮に譲渡。	
	1916-8	64	会賢洞の自宅で死去。ソウル外国人墓地公園に埋葬。	



## —目次—

導入	2
入口	2
フランツ・エッケルトについて	2
軍楽隊	4
活躍地	5
ノイローデ	5
ナイセ	6
ヴィルヘルムスハーフェン	8
日本の軍楽隊指揮者の求人とエッケルトの赴任	9
東京の外国人	10
東京合唱協会	10
東京	12
バート・ゾーデン	14
ソウル	15
作品	18
君が代	19
哀の極	20
大韓帝国愛国歌	20
韓国の軍楽隊（『東明』）	21
終わりに	21

## 導入

### 【入口】

#### Panel 1

##### ごあいさつ

この展覧会は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)）「近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究—お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に」で進めている研究から、最新の成果および新発見資料を紹介するものである。

この展覧会の特徴は、フランツ・エッケルト(1852-1916)という人物を、直接関わる資料が極めて少ないにもかかわらず、あえて中心にすえたことである。エッケルトは1879年来日し、没年の1916年まで主に日本と韓国（朝鮮）で活躍した。来日以前にドイツで得た音楽経験を活かして、西洋音楽文化を日本と韓国に伝えたのである。私たち研究者としては、一方ではエッケルトの生まれ育った環境、その地域の当時の音楽文化、他方では彼が東アジアで活躍した条件などを十分に理解すれば、本人についての資料がほとんどなくても、彼が文化交流にどのような役割をしたかが明らかになるのではないかと考えている。

解説パネルの数とそれぞれの文字数が大変多くなったが、各コーナーを一つ一つのマイクロコスモスとしてゆっくり鑑賞していただければ幸いである。

ヘルマン・ゴチェフスキ

#### Panel 2

##### 展示案内

この展示室の外壁に沿ってエッケルトが暮らしていた場所を順番に訪れることができる。出生の地ノイローデ（入り口）からナイセ、ヴィルヘルムスハ

ーフェン、そして東京の20年間、その後一時帰国したバート・ゾーデンと最後の15年間を過ごしたソウルである。

外壁に囲まれた展示室は大きく2部屋に分かれている。それぞれの部屋の中央には島のような展示スペースがある。先に入る小展示室の島ではエッケルトの家族を紹介する。後で入る大展示室の島（マルセル・デュシャンの大ガラス作品があるところ）ではエッケルトの作品が紹介されている。そこには電子キーボードとピアノ用楽譜を用意したので、よければ是非エッケルトの作品を弾いてほしい。

二つの展示室を分ける内壁には、さまざまなテーマの資料を展示している。中でも東京合唱協会の会誌に掲載された風刺画は見どころの一つである。協会も会誌もこの展覧会で初めて紹介されるものである。今まで知られることがなかった東京の愉快的音楽活動をゆっくり味わっていただければ幸いである。

#### Panel 3

##### 考察

音楽に関わる展覧会なので批判的な考察は必要がないと思われるかもしれないが、それは大きな誤解である。各展示コーナーで特に強調しなくても明らかに浮かんでくるのは、軍国主義・帝国主義と西洋音楽受容の関係である。明治政府が軍国主義・帝国主義でなければ西洋音楽が日本に早く受容されることはなかったといっても過言ではない。そして軍楽隊は本来、兵士の士気を鼓舞する手段であることは忘れてはならない。実際には本来の役割よりも娯楽を提供している場合が多かった。しかしそれもまた、軍隊が社会の一部として受け入れられることを推進するものであった。

軍楽隊のお雇い外国人教師が軍国主義を代表するプロイセンから雇われたのも決して偶然ではない。長年プロイセン軍に属していたエッケルトにとって、忠君愛国は国民の当然の責務で、彼はきっと《君が代》の創作にも《大韓帝国愛国歌》の創作にも、喜んで関わったに違いない。しかし皮肉にも晩年には、日本の植民地支配に苦しむ朝鮮で、日本の敵国であるドイツの市民として二重に困難な状態に落ち込むのである。

(H.G.)

##### 【フランツ・エッケルトについて】

(左の展示室中央部)

#### Panel Eck-1

##### フランツ・エッケルトとその家族 (1)

フランツ・エッケルトは1852年4月5日ノイローデ市に生まれた。父は裁判所の書記で、母は指物師の娘であった。8人兄弟の五男で末っ子であったが、長男、次男、三男は幼児の時、三女は彼が生まれて間もなく亡くなったので、フランツは兄一人と姉二人とともに育ったと思われる。エッケルトの両親は二人とも終生ノイローデ市に暮らしていた。母は彼が15歳の時に亡くなったが、父は息子が日本で成功し始めてから1885年に80歳で亡くなった。

フランツはナイセ市の軍楽隊に奉職中、1875年23歳で農家の娘で同年輩のマティルデ・フーフと彼女の実家、ナイセ市付近のファルケナウで結婚し

た。彼女は結婚以前ナイセ市で小間使いの仕事をしていて、二人は彼女の兄アウグスト・フーフ（1845～1905）を通して知り合ったと考えられる。アウグストはフランツと同様にナイセの軍楽隊に勤めていた。アウグストと、フランツの軍楽隊長ダネンベルクはフランツとマティルデの結婚立会人となった。

(H.G.)

Panel Eck-2

### ノイローデのエッケルト家と音楽

エッケルト家の音楽についてはあまり知られていないが、フランツ・エッケルトの父が都市の音楽界で積極的な役割を果たしていたことはいくつかの資料で確認できる<sup>1</sup>。彼はもともと織物職人で、後に裁判所の書記となった。彼自身も息子と同様に若い時に軍楽隊員だったかどうかは不明だが、彼が一時元軍楽隊員で構成された楽隊を指揮しダンス会や葬儀で演奏していたことからその可能性が高い。彼は長年ツェツィリエン協会のメンバーでもあり、そこに音楽教師の役割を果たしていた。息子フランツには管楽器を教えていたと伝わっている。

エッケルト家で音楽が盛んに行われたことは、成人に達した二人の息子が両方とも職業音楽家になったという事実からも推測できる。弟フランツが生涯親しくしていた兄ヴェンツェル（1846～1901）がどのような音楽活動を行っていたかは知られていないが、彼は1875年にクリスティアニア（今日のオスロ）、その後ベルリン（確実には1882年と1900～1901年）で音楽家として暮らしていたことは証明されている。彼はピアノ曲も作曲し、クリスティアニアで出版された。

- 1 この展示板裏のケース内およびヴィルヘルムスハーフェン・コーナーの海軍軍楽隊写真下のケース内参照。

(H.G.)

Panel Eck-3

### エッケルトの師匠たち

エッケルトは最初の音楽指導を父から受けたが、その後、軍隊に入隊する前と在役中に受けた音楽教育については何も知られていない。エッケルトの音楽経験に大きな影響を与えたと確認できる人物としては、彼が勤めていた二つの軍楽隊のそれぞれの隊長であったナイセ市のフリードリヒ・ダネンベルク（Friedrich Dannenberg）とヴィルヘルムスハーフェン市のカール・ラタン（Carl Latann, 1840～1888）だけである。前者の経歴について情報は少ないが、ラタンは比較的有名で、作曲家としても多作であった。彼の行進曲には今日まで演奏されているものもあり、エッケルトは彼の《祝典序曲》を日本でも指揮した。ラタンは1871年に「第二皇帝水兵隊ヴィルヘルムスハーフェン市音楽隊」を創立し、1884年までその楽隊長を勤めた。彼自身は主に軽音楽に属す作品を残し、ヴィルヘルムスハーフェン市の聴衆も古典派の音楽には関心がなかったにもかかわらず、ラタンは指揮者および室内楽奏者としてウィーン古典派作品の普及に絶えず努力した。

(H.G.)

Panel Eck-4

### フランツ・エッケルトとその家族 (2)

エッケルト夫妻には7人の子供が居て、その内3人の息子と3人の娘が成人するまで育った。

長女アマリエは結婚の1年後に生まれたが、その時にはエッケルトはすでにヴィルヘルムスハーフェンに転職していた。次女ヨハナ・ツェツィリエもヴィルヘルムスハーフェンで生まれているが、後の文献には一切出てこないで幼児の時に亡くなったと思われる。

1879年にエッケルトはまず一人で日本に渡った。妊娠していた妻は夫の出身地ノイローデに戻り、そこで長男フランツを生んだ。彼女が子供達と一緒に日本に来た正確な日付は分かっていないが、三女アナ＝イレネが1883年5月に日本で生まれたので1882年以前だったことになる。次男カール、三男ゲーオルク、四女エリーザベトも皆日本で生まれている。末っ子が生まれた1887年から長男と次男が教育のためにドイツに帰った1894年まで、エッケルト一家は8人家族として東京で暮らしていた。

(H.G.)

(ケース内)

### エッケルトの父——フランツ・エッケルト（1804～1885）

ノイローデで読まれた新聞記事と数日後の補足であるが、エッケルトの父の音楽活動について私たちが知ることができる少数の情報の一つである。補足においては再びエッケルトの給料の高さに注目している。

エッケルトの父は織物職人の息子で、元来彼自身も織物職人であったが、エッケルトが生まれる前にノイローデの裁判所の書記として採用され、この記事の当時には77歳で恩給で生活していた。しかしこの記事から読み取れるように、彼は若い時からカトリック教会の音楽協会で活躍し、そこで音楽教師の役割も果たしていた。

別の記事（ヴィルヘルムスハーフェンのコーナーで「日本の軍楽隊指揮者の求人とエッケルトの赴任」のケースを参照）から、彼が音楽隊を指揮し、管楽器を教えていたことも知られている。

(H.G.)

### 『山の便り』1882年11月24・28日号

11月22日、ノイローデ。（チェチリア祭と記念式典。）聖チェチリアの祝日である今日、当地の音楽協会は創立167年を記念してこの日を盛大に祝った。同協会の極めて功績ある会員で、退職した書記のエッケルト氏、及び織物工場主のベネディクト・グリュースナー氏は、この日、会員歴半世紀を迎えた。特にエッケルト氏には、当地の教会合唱団の団員のほとんど全員そしてそれ以外の多くの方々も音楽的訓練において多くを負っている。教会音楽に関する二人の大いなる功績のゆえに、協会はその前日、この機会のために特別に作詞作曲された歌曲によってささやかな感謝の意を表した。当日には8時から荘厳なミサが執り行われ、その中でB. ハーンによる第5〔?〕ミサが演奏された。二人は代表団によって迎えられ、教区教会横の校舎へと案内された。その後、

そこから協会は行進曲の祝祭的な響きの下、二つの立派な、非常に古い協会杯を先に立てつつ、店主 J. ベーム氏のレストランへと移動した。事務的な事柄の処理が済んだ後、正餐が始まったが、それには市長と、市議会議長ジンダーマン氏も列席した。二人の老練な音楽家に向けて作詞された食卓歌は一同の喝采を得た。夕べにはより大きめの演奏会が催され、すでにおなじみで人気の高い「ロンベルク[作曲]の鐘の歌」が演奏された。くつろいだ雰囲気の中で一日の祝典を締めくくった。願わくば、まだかくしゃくとしているこのお二人が末長く協会員にとどまり続け、在籍 60 年をも祝われますように。

(11月28日、ノイローデ)

[...] 当地の教会合唱団の団員たちのほとんどそしてそれ以外の多くの方々も音楽的訓練について多くを負っているエッケルト氏については、前号の『山の便り』に記事が載ったが、それに加え、次の間違いなく興味深い情報についてもぜひお知らせしておきたい。彼の二人の息子のうち一人は目下日本の帝国海軍の軍楽隊長であり、その収入はドイツのどんな音楽監督も及ばないほどであるということだ。 [...]

【訳】 (K.O.)

(ケース内)

### エッケルトの兄——ヴェンツェル・エッケルト (1846~1901)

エッケルトの兄ヴェンツェルがどのような音楽活動を行っていたかは知られていないが、彼が 1875 年にクリスティアーニア (現在のオスロ)、その後ベルリン (確実には 1882 年および 1900-1901 年) で、音楽家として暮らしていたことは証明されている。ヴェンツェルは生涯を通じて弟フランツと親しくしており、フランツの長男は学生時代、ベルリンのヴェンツェル宅に下宿している。またフランツの最も重要な弟子である吉本光蔵も、ベルリン留学中、ヴェンツェル宅に下宿していた。

ヴェンツェルはピアノ曲《ドーリス・ポルカ》Op. 5 (デンマーク王立図書館所蔵) も作曲しており、その作品はクリスティアーニアで出版されている。

(H.G.)

(ケース内)

### エッケルトの義理の兄——アウグスト・フーフ (1845~1905)

エッケルトの妻マティルデは 9 人兄弟の家族の出身であったが、おそらく長男であったアウグスト・フーフは軍楽隊員としてエッケルトの先輩でもあり、結婚立会人でもあった。この死亡記事は彼の音楽的活躍も紹介している。

(H.G.)

『ポーゼン日報』1905 年 11 月 24 日号

訃報 我々の間で最も有名な市民の一人、郵便局書記官のアウグスト・フーフ氏が、本日未明 3 時 45 分に脳卒中のため突然亡くなった。故人の享年は 60 と半年であった。彼は 1874 年以来、電報管理部門に所属しており、20 年以上、当地の上級郵政監督局資材課 (現在の電報機材課) の長を務めた。彼はすべての上司から重んじられ、信

頼を得ており、同僚にも少なからぬ好意を持たれていた。フーフ氏はナイセで、王室音楽監督シュトゥッケンシュミット氏に師事し、彼にしっかりとした理論的訓練も受けながら、軍楽隊員として実践的経験を積んだ。軍楽隊員として彼はカペルマイスターの試験に合格したものの、実際にその職に就く機会はなかった。しかし彼はナイセにおいて多年にわたりオペレッタの上演を指揮した。ポーゼンでは彼は何年間も国土防衛軍合唱団、民謡の会、リーダークラッツなどで指揮者として活躍し、また男声合唱の組織の普及に大変尽力した。イェルジッツ合唱クラブは、とりわけこのフーフ氏をその創設者の一人に数える。彼が作曲した作品には、彼が指揮した男声合唱団のために書かれた合唱曲の他にいくつかの器楽曲およびオペラ《ツリニー》、《鉱員たち》、及びより小規模な歌芝居がある。ストレートで実直、また好感の持てる親切な人柄により、広く市民たちの間で愛され、尊敬されていたフーフ氏の死によって、一人の正真正銘のドイツ人男性が世を去った。彼の思い出はいつまでも忘れられることがないだろう!

【訳】 (K.O.)

### アウグスト・フーフの韓国勲章の謎

大韓帝国の『高宗実録』には 1905 年 8 月 17 日にフーフ (亨亨) というドイツ人の「郵便参書官」が「幫助軍楽節奏著効」、つまり韓国の軍楽隊に協力したという理由で叙勲されたという記録がある。フーフはドイツでは珍しい名前であり、エッケルトが大韓帝国で活躍中の時代に軍楽隊に関わったこと、さらに職名を考慮すれば、このフーフはエッケルトの義理の兄アウグスト・フーフであった可能性が高い。そうだと、エッケルトとフーフは、二人がナイセから去った後も音楽で助け合っていたということが分かる。ただしフーフは韓国の軍楽隊にどのように貢献したかは今まで知られていない。

(H.G.)

### 【軍楽隊】

Panel Mm-1

#### プロイセンの軍楽隊

軍事国家プロイセンでは軍楽隊が全国各地に駐屯しており、どの連隊 (2000 人程度) も 40 人程度の音楽隊を備えていた。1881 年に出版された『軍楽隊員年鑑』にはドイツ帝国全体で 347 隊の軍楽隊が収録されている。大都市にも多くの軍楽隊が配置されていたが、職業音楽家のほとんど存在しない地方ではその文化的役割がそれよりも遥かに大きかった。多くの場合、軍楽隊は大編成の演奏を初めて可能にし、娯楽的な演奏会を提供するとともに重要な音楽作品を地方の国民に紹介した。軍楽隊は吹奏楽、管弦楽、弦楽など、楽隊全員でも小編成でも各種の民間音楽活動に雇われた。軍楽隊主催の「軍事演奏会」もプロイセンの音楽文化においてはどこでも見られる現象であり、一部の軍楽隊は軍事以外でも絶えず演奏活動で村から村へ移動していた。例えば軍が駐屯していないために軍楽隊も配置されていなかったノイローデでも周辺の軍楽隊がよく演奏会を開いていた。

(H.G.)

Panel Mm-2

### プロイセンにおける軍楽隊員としてのキャリア

軍楽隊員の多くは志願兵として入隊していたが、その最少年齢は 17 歳であった。軍楽隊に入隊するには隊長との面接があり、楽隊の要請の他に志願者の音楽能力が認定基準であった。軍楽隊員に在職年数の期限はなかったが、12 年以上勤めれば 1000 マルク（普通の隊員の数年の給料に当たる金額）の退職金を受ける権利があった。それに加えて退職した軍楽隊員には優先的に公務員（郵便局、鉄道など）のポストが与えられた。そのために多くの軍楽隊員が 12 年間勤めた後民間の仕事に転職した。

この恵まれた条件により軍楽隊員のポストは貧しい家庭に生まれ音楽才能のある若者に人気があった。これによって小学卒の少年を受け入れ軍楽隊の入試合格を約束する、「ムジークマイスター」と呼ばれる元軍楽隊員によって運営される音楽塾が田舎の市町村にまで数多くできた。このような音楽塾は学費をほとんど取れなかったため、全ての楽器に及ぶ音楽指導は一人の教師と既習の生徒が担当し、運営資金は村の舞踊会などにおける生徒たちの出張演奏によって獲得する場合が多かった。

(H.G.)

Panel Mm-3

### プロイセンの軍楽隊長

プロイセン王国の軍楽隊の指揮者は「シュタープスオーボイスト」、「カペルマイスター」、「ムズィークマイスター」、「音楽指揮者」、「音楽監督」などの肩書きを持っていたが、ここでは簡単に「軍楽隊長」と呼ぶことにする。軍楽隊員の選定と入隊後の音楽教育に責任を持っていたので、軍楽隊の水準は軍楽隊長の人的・専門的能力に大いに関係していた。優秀な軍楽隊長は作曲と自作演奏も期待されていた。

軍楽隊長の多くは庶民出身で、体系的な教育というよりも才能と経験によって出世していたから、市民文化であるクラシック音楽には縁が薄かった。しかし 1874 年以来プロイセン政府は軍楽隊の芸術的水準を高めるべく、ベルリン国立高等音楽院に 2 年間の軍人コースを設け、軍楽隊長となる見込みのある優秀な軍楽隊員から毎年 10 人を選定し音大に派遣することにした。徐々にこのコースを卒業することが軍楽隊長になるための必要条件となり、軍楽隊のレパートリーも次第に市民音楽文化に近づけられた。

(H.G.)

Panel Mm-4

### 軍楽隊員の職名

プロイセンの軍隊には兵種により軍楽隊員の職名が異なっていた。歩兵や水兵の軍楽隊員は「Hautboist」（オーボエ奏者）、砲兵では「(Wald-)Hornist」（ホルン奏者）、騎兵では「Trompeter」（トランペット奏者）と呼ばれていた。それは元来そういう楽器を中心とする楽隊があったからである。また一部の軍楽隊には「Janitschar」（ヤニチャール）という職名の楽師グループもいた。これは 18 世紀プロイセンの軍楽隊にトルコの音楽が導入された史実に基づく名称である。しかし 19

世紀後半にはいずれの職名も慣習的なものであり、軍楽隊の構成や各楽隊員の担当楽器とは何の関係もなくなっていた。

軍楽隊員には下士官と一般兵士、常勤と非常勤（補助員）の違いによって位付けされていた。海軍軍楽隊の特徴として「上級音楽隊員」（Ober-Hautboist）の職名があった。エッケルトが 3 年間勤めていたヴァイルヘルムスハーフェンの「第二皇帝水兵隊」の音楽隊では、46 人の楽隊員中 18 人が上級音楽隊員の地位に付いていた（パネル Wil-5 参照）。

(H.G.)

## 活躍地

### 【ノイローデ】

Panel Neu-1

### エッケルトの故郷ノイローデとその周辺

#### ——政治行政——

後にフランツ・エッケルト生誕の地となったノイローデ市（Neurode）とエッケルトが結婚するまで縁のあった場所はボヘミア（独ベーメン）とシレジア（独シュレージエン）の国境近くにあった。中世以降、シレジアはボヘミアとともにボヘミア王冠領に属していた。1526 年、オーストリアのハプスブルク家がボヘミアの王位を継承し、それ以来「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」南東の全てはハプスブルクの支配下にあった（パネル Neu-5、地図 2 の黄土色の部分、通称「オーストリア」）。ノイローデ市は伯爵領グラッツ（Glatz）に属し、この伯爵領は 18 世紀までボヘミアに属していたが、18 世紀半ばにはシレジアの大部分とともにプロイセンの支配下に入り、国境によって切り離されたボヘミアから自立した。1818 年にはプロイセンの行政上の理由によりシレジア州に属するようになった（パネル Neu-5、地図 1 と地図 3 参照）。第二次世界大戦後この地域は南ポーランドに属し、チェコの国境に隣接している（パネル Neu-5、地図 4 参照）。

(H.G.)

Panel Neu-2

### エッケルトの出身地——宗教

ボヘミアとシレジアでは 16 世紀に宗教改革のもとほとんど全てがプロテスタントになっていたが、1620 年以来オーストリアが対抗宗教改革を強制的に断行し、ボヘミアのほとんど全てとシレジアの一部がカトリックに戻された。ただしシレジアではさまざまな事情によりこの政策が部分的にしか成功せず、多くの地域はプロテスタントのまま残った。結果的にシレジア地方は宗教的に分裂した国となり、その影響は 20 世紀まで及んだ。

エッケルトが育った時代もシレジアの住民間には多大な宗教的緊張があった。エッケルトが生まれたノイローデと彼が長年勤めていたナイセはシレジアのカトリック地域であったが、エッケルトが一時教育を受けたと思われるシレジア州の首都ブレスラウは主にプロテスタントの信者が住んでいた地域であった。従って古くからノイローデに住んでいた家庭

に生まれたエッケルトはカトリックであったが、プロテスタントを主流とするプロイセンにおけるカトリックの周縁地帯出身者として祖国において文化的なマイノリティーに属していたと言える。

(H.G.)

#### Panel Neu-3

##### フランツ・エッケルトの生誕地における市民文化

ノイローデは山間の辺境の街で、エッケルトが住んでいた当時は辿り着くにも困難な地であった。周りのボヘミアやシレジアの地域と同様に、すでにハプスブルク帝国時代から織物業が主要な産業となっていた。また、小さな鉱山も古くからあった。1800年前後は織物業がブームになり、ノイローデの人口が移住民によって40年間で2400人から4500人まで二倍近くに増えた。エッケルトの祖先もどこからか分からないが、この時代にノイローデに移住してきたと思われる。経済ブームの時代にあたる1799年にはオペラハウスまでも出来ていた。それはすぐ潰れてしまったが、潰れたオペラハウスから劇場が発展し、エッケルトの時代でも引き続き興行が行われていた。しかし19世紀には織物業が次々と危機に直面し、ノイローデはその地域のもっとも貧しい都市のひとつとなった。19世紀後半、特に鉄道がノイローデまで開通した1879年以降、鉱山が発展し、ノイローデの主要な産業となった。それが街の文化（「鉱山管弦楽団」など）にも多大な影響を及ぼしたが、エッケルトはこの発展が本格化する以前の1860年代にノイローデを去った。

エッケルト時代(1864年)の統計:ノイローデ市の人口:6121人(カトリック5616人[92%]、プロテスタント481人、ユダヤ教21人、バプテテスト3人)

(H.G.)

#### Panel Neu-4

##### 19世紀におけるノイローデ市の音楽界

ノイローデのようなプロイセンの辺境の小都市には基本的に職業音楽家は存在しなかった。従って音楽界は学校の先生たちやアマチュアによって支えられていた。しばしば彼らは器楽を教えたり音楽協会を作っていた。こういうアマチュア協会によってノイローデの劇場にはときおり本格的なオペラ、例えばロルツィングの《ロシア皇帝と船大工》やボイエルの《白衣の婦人》も上演された。

ノイローデには古い音楽協会(1716年結成、エッケルトの時代では「ツェツィリエン協会」と呼ばれた)があり、主にカトリック教会の器楽と声楽を担当していた。1858年には、この時代でシレジアの他の都市にも多く見られるように、男性合唱協会も作られた。

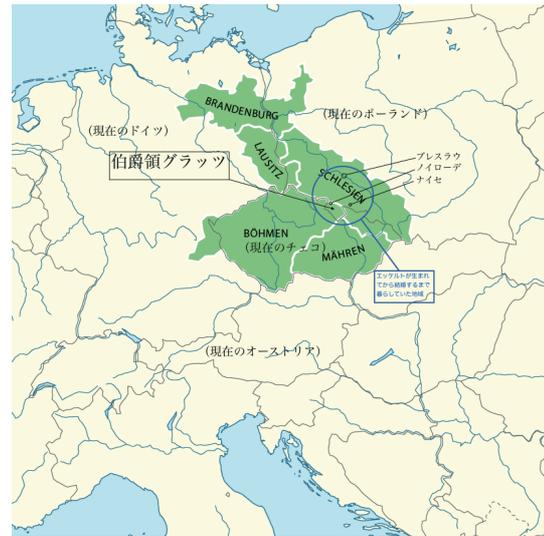
ノイローデにはときどき演奏ツアーでやってくる音楽家の演奏会も開かれ、それらは常に多くの観客を呼んだ。ノイローデの市民たちは古典派の音楽を好んでいたが、保守的な趣味を持っていた人が多かった。従って1880年ごろになってもベートーヴェンが難解だとされ、ハイドンの方が好まれた。

(H.G.)

#### Panel Neu-5

##### 中央ヨーロッパの歴史の中に見るフランツ・エッケルトの出身地

##### 地図1



ボヘミア王冠領諸国の歴史的な国境(白い線、14世紀のカール4世時代)と今日のヨーロッパ諸国の国境(灰色の線)。ボヘミアBöhmenとシレジアSchlesienの間で白い線と灰色の線に囲まれた地域は伯爵領グラッツGlatzである。この地区は18世紀半ばまでボヘミアに属し、その後プロイセンの支配下に入り自立した地域となり、1818年にプロイセンのシレジア州に吸収された。ボヘミアとシレジアの間にある灰色の国境の位置自体は18世紀半ばから現在まで変わっていないが、その南北にある国名は数回変わった。つまりその線は1918年までプロイセン王国(1871以来ドイツ帝国の一部)とオーストリアの国境であったが、第一次世界大戦後はドイツとチェコスロバキアの国境、第二次世界大戦後はポーランドとチェコスロバキア(1992年よりチェコ)の国境となり現在に至る。エッケルトの出身地では1945年まで(チェコスロバキア建国後でも)国境の両側にドイツ語を話す国民が大半を占めていたが、第二次世界大戦後にはドイツ国民の大多数が追放され、今日では国境の北側にポーランド語、南側にはチェコ語を話す国民が住んでいる。

(H.G.)

##### 【ナイセ】

#### Panel Nei-1

##### 軍事都市ナイセ

中世以来司教座でありシレジアの重要な都市であったナイセ市はすでに30年戦争から城郭都市であったが、1741年プロイセンに占領された後フリードリヒ二世によってさらに堅固に防備され「強大な要塞」を持ちオーストリアに対してプロイセンを防衛するための重要な軍事都市の一つとなった。これは19世紀でも変わらなかった。1860年にプロイセンの(ポツダムとエアフルトの後)第三の「戦争学校」(Kriegsschule)がナイセ市に設立された。エッケルト時代にはナイセ市の約4分の1の人口が軍人であった。

早1848年にナイセからブリークの鉄道が開通し、ブレスラウやベルリンへも直接行けるようになっていた。ナイセ市はその都市にふさわしい文化もあり、その中でも1852年に建てられた劇場が抜きん出た役割を果たしていた。

従ってナイセ市はノイローデ市と比べればより大きな都市であるだけでなく、鉄道や軍隊によってプロイセンの近代化がより目立つ地域でもあった。

エッケルト時代(1875年)の統計:ナイセ市の人口:19811人(カトリック82%、プロテスタント15%、ユダヤ教2.5%)  
(H.G.)

#### Panel Nei-2

### 19世紀におけるナイセ市の音楽界

ナイセ市のような軍事都市では劇場の他、軍楽隊が当然ながら音楽界で中心的な役割を果たしていた(パネル Nei-1 と Nei-3 参照)。エッケルトのナイセ時代には少なくとも四つの軍楽隊がナイセ市を所在地とし、それぞれ25人から40人の編成で吹奏楽と管弦楽の両方を演奏していた。19世紀前半の文献によるとナイセ市の音楽的水準は大いに軍楽隊に依存していた。しかし1845年から1865年までナイセで活躍したヨハン・ハインリヒ・シトゥッケンシミット(パネル Nei-4 参照)の影響で民間の音楽活動もその後再び見られない程の隆盛期に達した。この時代にはナイセのオラトリオや交響曲の上演が地域を越えて注目を得、ナイセ市は一時的にシレジアの男性合唱運動の中心地ともなった。シトゥッケンシミットはエッケルトの義理の兄で結婚の証人でもあったアウグスト・フーフの音楽師匠でもあった(この展示スペースの中央に置いてあるケース内参照)。  
(H.G.)

#### Panel Nei-3

### ナイセ市の劇場音楽における軍楽隊

19世紀後半プロイセンの多くの地方都市と同様に、ナイセ市の劇場音楽は軍楽隊によって行われた。プロイセンのほとんど全ての軍楽隊には楽隊員たちが二つの楽器(主要楽器:狭義の軍事音楽のための管楽器、補助楽器:民間の演奏会のための楽器、多くの場合は弦楽器)を担当していた。それによって軍楽隊は交響楽をオリジナル編成で演奏することができた。必要に応じて二つの軍楽隊を合併させて演奏していた。軍楽隊には一部の楽隊員のみが常勤のポストを持っていたので、民間の演奏会は運営資金の獲得にも必要であった。従ってプロイセンの軍楽隊は半官半民の組織だったといえる。

ナイセ市には主に長い歴史を持つ「第二上部シレジア歩兵第23連隊」の音楽隊が劇場音楽を担当していた。しかし1860年新しく形成された「第四上部シレジア歩兵第63連隊」の音楽隊も定期的に劇場音楽の担当となっていた。エッケルトはヴィルヘルムスハーフェンに移るまで後者の楽隊に補助音楽家として勤めていた。

(H.G.)

#### Panel Nei-4

### ナイセ市でのヨハン・ハインリヒ・シトゥッケンシミット

有名な音楽評論家ハンス・ハインツ・シトゥッケンシミットの祖父であったヨハン・ハインリヒ・シトゥッケンシミット(1819~1870)は1845年から1865年までナイセ市で活躍した。ブレーメン市に生まれ、同市のW・F・リーム音楽監督と、男性合唱運動とドイツ国民運動の巨匠でありブラウンシュヴァイク市のオペラハウスで宮廷音楽監督として勤めていたA・メトフェッセルのもとで学び、数年作曲家ならびに指揮者として国際的な経験(パッサウ市、インスブルック市、トリエステ市)を積んだ上、1845年に声楽や音楽の教師としてナイセ市に居をかまえた。

ナイセ市でシトゥッケンシミットは1846年にジングアカデミー(混声合唱団)と1852年に器楽協会を創立した。アマチュア協会ではあったが、それらをもって古典派やロマン派の大作を地方の聴衆に紹介した。また彼が1847年に創立した民族的・愛国的合唱曲を中心とする男性合唱協会は活発に活躍し、間もなくシレジアの男性合唱運動を牽引した。1862年にシトゥッケンシミットはシレジア各地の男性合唱協会をまとめる「シレジア合唱連盟」(同年に作られた「ドイツ合唱連盟」の地方版)を創立し、その会長ともなった。

(H.G.)

#### Panel Nei-5

### ナイセ市立劇場

ナイセ市立劇場の演劇と音楽はどのようなものであったのかは1872~73年の冬シーズンのプログラムチラシ(上)からある程度読み取れる。1873年の『ドイツ舞台年鑑』(下)によればシヴァイドニッツ市やヴァルムブルン市の芝居も担当していた一座は、ナイセ市立劇場では1872年10月31日から1873年1月16日までの間に少なくとも53回の上演に際してほとんど毎回別々のプログラムを演じていた。多くのプログラムからは音楽・歌・舞踊が上演されたことが分かるが、ここでは特に音楽が重要な役割を果たした公演のプログラムを展示している。11月21日には3番目の作品としてオッフエンバックのオペレッタ《チュリパタン島》が上演され、11月29日には幕間音楽としてロッシーニやスッペの序曲が弾かれ、12月3日には女流歌手ヘードヴィッヒ・リヒターが出演し、12月17日にはゲーテのエグモント上演を機会にベートーヴェンの《エグモント》劇音楽も演奏された。すべての公演では「第二上部シレジア歩兵第23連隊」と「第四上部シレジア歩兵第63連隊」の両軍楽隊が音楽の伴奏を担当していたので、後者の楽隊員であった、当時二十歳のエッケルトもこれらの公演に参加したと思われる。  
(H.G.)

#### Panel Nei-地図

### ナイセ市の略図

ナイセ川の南側には星形要塞に囲まれた旧市街があり、北側には後でプロイセン軍の訓練のために足された様々な巨大な建築物が見られる。当時の鉄道

はナイセ川の北東にある軍事施設の横に終着駅があった。

(H.G.)

### 【ヴィルヘルムスハーフェン】

Panel Wil-1

#### 海軍都市ヴィルヘルムスハーフェン

長く海軍を持たなかったプロイセンは 19 世紀半ばから近代的な海軍の創設に着手したが、元来全ての軍港はバルト海にあった。北海にも基地を設置するためにプロイセン王国は 1853 年にオルデンブルク大公国からそれに適した沿海区域を買取った。工事は 1858 年に始まり、1869 年には港が開港され、プロイセン王（後の初代ドイツ皇帝）の名前を受けて「ヴィルヘルムスハーフェン」と呼ばれるようになった。普仏戦争後の 1871 年に「帝国造船所ヴィルヘルムスハーフェン」も開業した。労働者のための仮設住宅から始まった都市は 1875 年になっても人口一万人の 3 分の 2 が男性で、見る者を圧倒する建造物が立ち並ぶ反面、乱暴者が多い、治安が悪いなど、同時代の記事には批判的な表現が目立つ。軍人のほかに流れ者や一攫千金を目指す人々によって急速に増えていった市民はドイツ各地からの寄せ集めであり、エッケルト時代には文化活動の土台がまだ出来ていなかったと考えられる。

(H.G.)

Panel Wil-2

#### エッケルトが住んでいたヴィルヘルムスハーフェンの兵舎

エッケルトの長女と（早く亡くなったと思われ、後の文献に言及されていない）次女の誕生届には彼のヴィルヘルムスハーフェンの住所も書かれている。長女の場合は「600 人兵舎」で、次女の場合は「造船所兵舎」である。これはおそらく同一の建物の別名である。造船所の近くには順番に三つの大きな兵舎が建てられ、その最初の二つは同じ設計で 600 人用で（当時はこれらと同じ設計でプロイセン各地に多くの兵舎があった）、最後に建てられたのは 1000 人用の巨大なものであった。エッケルトが引っ越してきた当時は 600 人用の兵舎が一つしか存在しなかったため、それが単に「600 人兵舎」と呼ばれたが、その左に二つ目が出来た時に前者が「造船所兵舎」、後者が「港兵舎」と呼ばれるようになった。エッケルトが居なくなつてからの話だが、最後に出来た兵舎がその後数十年間単に「1000 人兵舎」という名称で知られていた。今日ではいずれの兵舎も残っていない。

(H.G.)

Panel Wil-3

#### ヴィルヘルムスハーフェンのカール・ラタン(その1)

以前に船の楽隊を指揮していたカール・ラタン（1840～1888 年）は普仏戦争終了後ヴィルヘルムスハーフェンに海軍軍楽隊を創立する依頼を受けた。彼の元で演奏していた船上楽隊員に加えて、ラタンは 1872 年 1 月の『総合音楽新聞』に「優秀な金管・木管楽器奏者を好条件で」募集した。こうして構成された「第二皇帝水兵隊ヴィルヘルムスハーフェン

市音楽隊」はまもなく同市の（それ以外にほとんど存在していなかった）音楽生活の中心となった。とくに演奏会シーズンに毎週行われていた人気の「シュトラウス風演奏会」ではヨーハン・シュトラウスなどの舞曲や軽音楽が演奏された。楽隊は国内演奏旅行もしたが、エッケルトが楽隊員だった当時にもそうした旅行活動があったかどうかは不明である。他に分かっていることは、ヴィルヘルムスハーフェンにはナイセのような立派な劇場文化がなかったにもかかわらず、ラタンの軍楽隊が 1876 年に一時的に劇場音楽も担当したことである。

(H.G.)

Panel Wil-4

#### ヴィルヘルムスハーフェンのカール・ラタン(その2)

1881 年の『軍楽隊員年鑑』に載っている「第二皇帝水兵隊ヴィルヘルムスハーフェン市音楽隊」の楽器編成が示すように、この楽隊は、当時のプロイセンの軍楽隊の一般的な傾向と同じく（パネル Mm-1 参照）、吹奏楽でも管弦楽でも演奏することが出来た。ラタンは毎年現地のホテルに行われた複数の「交響楽演奏会」で古典派の交響曲の演奏にも努めたが、聴衆の反響はあまり思わしくなかった。1878 年には楽隊が危機に陥り、15 人編成に縮小すると警告され、ラタン自身も辞任を申し出た。しかし結局縮小も辞任も避けられ、ラタンが 1884 年まで残った。なぜその年にフリードリヒ・ヴェールビーアに代わったのかは不明である。

軍楽隊の写真は 1900 年前後から徐々に増え、絵葉書としても販売されるようになる。「第二皇帝水兵隊ヴィルヘルムスハーフェン市音楽隊」の写真も複数現存する。知られている写真はすべてラタンの退任以後のものではあるが、エッケルトが 1876 年から 1879 年まで第一オーボエを吹いていた楽隊がどのような雰囲気であったかある程度想像させるものにはなるだろう。

(H.G.)

Panel Wil-5

#### 第二皇帝水兵隊ヴィルヘルムスハーフェン市音楽隊の楽器編成 (1881)

1881 年の『軍楽隊員年鑑』による「第二皇帝水兵隊ヴィルヘルムスハーフェン市音楽隊」の楽器編成。演奏者の軍人としての階級、演奏者としての地位、名字と吹奏楽時の担当楽器が書かれている。カッコ内は管弦楽時の担当楽器を示す。

(H.G.)

## 【日本の軍楽隊指揮者の求人とエッケルトの赴任】

(ケース内)

『軍隊週報』1878年末～1879年初



楽隊指揮者求む。ある海外の政府が、主に吹奏楽器から成る海軍軍楽隊のために卓越した人材、できれば軍楽隊長を探している。契約期間は2年。英語ができることが望ましいが必須ではない。ただしピアノの教授能力は必須。詳しくは J. R. 1478 [の符丁] の下、ベルリン南西ルドルフ・モッセに問い合わせられたし。

【訳】 (K.O.)

1878年末から1879年初にかけての複数号に出された広告。エッケルトはこの広告か、あるいは他紙(誌)に出た同様の広告を見て、日本海軍の職に応募したのであろう。

(H.G.)

(ケース内)

『ヴィルヘルムスハーフェン日報』1879年1月23日  
ヴィルヘルムスハーフェン、1月22日。伝えられるところでは、第2海兵隊軍楽隊のオーバー・オーボイスト、エッケルト氏は、ブレーメンの帝国議會議員モスレ氏の仲介により、2年間の予定で日本の軍楽隊長に就任することとなった。エッケルト氏はすでに帝国海軍本部より休職もしくは解職の許可を得ており、新たな職務に赴任するため、今月30日にはハンブルクより蒸気船でドイツを後にする予定とのこと。

【訳】 (K.O.)

(ケース内)

『ヴィルヘルムスハーフェン日報』1879年1月26日  
ヴィルヘルムスハーフェン、1月25日。第2海兵隊のオーバー・オーボイスト、エッケルト氏(第1オーボエ奏者)は日本の帝国政府より同国精鋭部隊の音楽監督に任命され、すでに蒸気船でハンブルクから旅立った。エッケルト氏の退任により決して軽視できない空隙が生じてしまったとはいえ、自らのうちにこのような卓越した地位を授けられた団員を持ったことについて、楽団とその司令部は誇りに思っただろう。エッケルト氏は、世界の遙か遠くの地にドイツ音楽を移入し、育てるために招聘された。有能で洗練された音楽

家である彼は、自分に委ねられた地位の名望を高めることだろう。

【訳】 (K.O.)

(ケース内)

『山の便り』1888年2月24日号

「?ノイローデ、2月22日。元プロイセン軍楽隊長で、現在日本の東京で日本帝国政府に奉職している楽長エッケルトは、ドイツ皇帝陛下より音楽監督の称号を賜ることとなった。同氏は当地の出身で、先般亡くなった元地方裁判所書記だった父親より音楽、特に吹奏楽器の手ほどきを受けた。エッケルトは長らくナイセの軍楽隊に隊員として奉職し、その後ヴィルヘルムスハーフェンに移った。同地で上述した日本の宮廷楽長の地位のオファーがあり、彼はそれを引き受け、すでに赴任して約8年にもなる。ドイツの音楽監督たちのうち、エッケルト氏のそれに匹敵する収入を得ている者はごく僅かであろう。というのも彼の年収は10,000から12,000マルクにも上るからである。[...]」

【訳】 (K.O.)

(ケース内)

『インディアナ・トリビューン』1904年3月24日号

グラッツからの報にもあるように、日本の皇室宮廷楽団の楽長はエッケルトという名のドイツ人である。彼はシュレージエンのノイローデの出身で、裁判所書記だった彼の父は、平民としてありとあらゆる職に就いている退役軍楽隊員を集めて臨時楽隊を作り、舞踏会やら葬式やらで演奏していた。こうして若い頃より音楽を習い覚えた息子は、およそ25年前にキールの海軍軍楽隊に入隊した。その頃、その軍楽隊長は日本からの招きを受け取ったが、彼はこれを断った。エッケルトは彼の代わりに東京へ行き、ごくごく未熟な段階にあった同地の楽団を立派なものへと育て上げた。後にミカドは彼に宮廷楽長の称号を授けた。日本に20年間滞在した後、エッケルトは2年ほど前、故郷で長めの休暇を楽しんだ。東京に戻った彼は、韓国皇帝の要請に応じ、韓国「軍隊」の極めてお粗末な状態にあった音楽組織を立て直すためソウルに赴いた。

【訳】 (K.O.)

アメリカで発行されたドイツ語新聞に掲載された記事である。「グラッツからの報」という表現から推測するに、その内容はノイローデ地方の新聞に基づくと思われる。エッケルトの両親の死去後の記事であり、エッケルト家と親しかった人物からの情報提供があった可能性がある。

シレジア以外の地域についての情報はかなり怪しい(例えば、ヴィルヘルムスハーフェンが同じく海軍が駐屯していたキールと間違われ、プロイセン王から音楽監督という称号を授与されたのが、日本の天皇から宮廷楽長の称号を受けたことに変わり、日本の解備が一時帰国とされている)。しかし、エッケルトのシレジア時代については他のどこにも書かれていない情報もあり、ある程度の信頼性があるのではないだろうか。

この記事で興味深いのは、エッケルト来日の経緯が書かれていることである。日本政府はエッケルトが所属していた軍楽隊の楽長カール・ラタンを招きたかったが、ラタンが断ったので代わりにエッケルトを雇用したというのである。求人広告に「できれば軍楽隊長を探している」と書かれていることから、こうした経緯があったとしても不思議ではない。

(H.G.)

## 【東京の外国人】

Panel Tgj-1

### 明治時代の東京の外国人

1899年(明治32年)以前に来日した外国人は、内地雑居が認められておらず、基本的に外国人居留地で暮らすことになっていた。しかし日本政府に雇われた御雇外国人や各国公使館に勤務する者は、居留地外に住むことを特別に許されていた。

外国人居留地は安政の五カ国条約にもとづき開港・開市が定められた都市に設けられたのだが、横浜などでは幕末から居留地が形成された一方で、築地などの居留地は維新後によりやく開かれた。築地居留地は首都に設けられた外国人居留地だったが、比較的近くの横浜居留地がいち早く発展していたこともあり、築地に入居した者は少なかった。

居留地などで生活する外国人は、外国人同士でコミュニティを形成した。たとえばドイツ出身者は1873年に日本やアジアの研究を目的としたOAG(ドイツ東洋文化研究協会)を東京に創設した。OAGは定期的に集会を開いており、メンバー同士の交流の場を提供する機能も果たしていたことが分かる。ちなみに、1881年頃にはOAG会員の3割以上が東京合唱協会(パネルTGV-2参照)にも入っており、東京合唱協会のほとんどのメンバーはOAG会員だった。

(Ka.S.)

Panel Tgj-1a



### 築地外国人居留地の夏の夜

『東京合唱協会の珍談さまざま』1881年7・8月号  
(ゴチエフスキ研究室所蔵)

Panel Tgj-2

### 東京のドイツ人

来日したエッケルトは、御雇外国人や商人などとして東京に暮らすドイツ人のコミュニティに参加することとなった。彼らが日本での生活や日本人との交流の中で感じたことは、E・ベルツの日記などから想像することができる。しかし、彼らは東京に暮らす他の西洋諸国出身者とも交流しなければならなかった。

当時の東京に暮らしていた西洋人の多くは英米の出身だった。そのため東京の西洋人同士の“共通語”は英語であり、西洋人が経営する店で買い物するのにも大抵は英語が必要だった。ドイツ出身者が不自由なく生活するためには、英語を学ぶことが不可欠だったのである。東京のドイツ人コミュニティの中では、英語をうまく話せないことの自虐が、ある種の典型的な笑い話になっていたようだ。

(Ka.S.)

Panel Tgj-3

### 保養地・伊香保温泉

1882年の夏、エッケルトは来日後初めての家族旅行を楽しんだ。その際の旅券申請に関連する文書からは、彼が「健康保全」を名目として伊香保温泉を旅行先を選んだことが分かる。

伊香保は日本国内では古くから名の知られた温泉地で、明治時代に入ってから案内書や錦絵も残されている。エッケルトが旅行した頃、東京から伊香保へ向かうルートは、中山道で高崎まで行き(1884年には上野・高崎間の鉄道開通) 渋川あるいは柏木を経由して伊香保へ、というのが一般的だったようだ。

御雇外国人のベルツは風光明媚な温泉地だった伊香保を保養地として高く評価した。イギリスのE・M・サトウらの編著にかかるガイドブック *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* (初版1881年)でも伊香保は取り上げられ、1884年の第2版以降は温泉に関する情報がベルツの協力のもと増補されている。

(Ka.S.)

## 【東京合唱協会】

Panel TGV-1

### ドイツの男性合唱協会

19世紀や20世紀のドイツ語圏における音楽生活には男性合唱協会が特記すべき役割を果たし、社会的・政治的・教育的に重要な使命を帯びていた。男性合唱協会は2種類に分類され、その両方が19世紀前半に現れた。一方は1809年C・F・ツェルターによってベルリンで創立された「リーダーターフェル」(歌の食卓)に遡る。このような協会は少人数の教養人で構成され、各メンバーは作詞、作曲、演説などをする義務があった。他方はH・G・ネーグリーやF・ズイルヒャーの活動に基づき、より大衆的な性格を持っていた。この種の協会は主に歌手の一体感、愛国心と道徳の振興を目的とし、合唱祭の際には数千人が一緒に歌う活動が典型的である。東京合唱協会の活動は二種類の要素を備えていたといえる。ちなみに外国においてドイツ人の男性合唱

協会が作られることは、東京以外にも多くの例がある。

男性合唱協会は基本的に会員と定款によって支えられていた。指揮者はメンバーに雇われ、報酬が会費から支払われていたので、総会の投票権はなかった。

(H.G.)

Panel TGV-2

### 東京合唱協会の成立

本国で男性合唱協会という音楽文化に親しんでいた(パネル TGV-1 参照)東京に暮らすドイツ人たちは、東京合唱協会を設立した。1880年3月19日付の定款が残されていることから、協会の活動が始まった時期を推測できる。定款の末尾に記載された協会の名簿からは、エッケルトが指揮者だったこと、協会長の御雇外国人ベルツをはじめ17名が会員として参加していたことが分かる。

協会は毎週金曜日の晩に活動する傍ら、時おりコンサートに出たりしていたようである。日々の活動の雰囲気は、ユーモラスな会誌 *Allerhand Lustiges aus dem Tokio Gesang Verein* (『東京合唱協会の珍談さまざま』) から窺い知ることができる。会誌は会員の R・スコット(「小さいスコット」)が個人的に作成したものと思われ、1881年1月号から7・8月合併号まで毎月発行され、一度の中断をはさんで1884年1月号・2月号、1885年1月号が現在確認されている。

(Ka.S.)

TGV-3

### 東京合唱協会の活動風景

#### ——西洋料理店・萬代軒にて——

東京合唱協会が普段の活動場所として選んだのは、西洋料理店の萬代軒であった。萬代軒は神田区淡路町(現在の千代田区神田淡路町)に店舗を構え、東京の有名な西洋料理店として、精養軒と並び明治期の多くの東京案内で紹介されている。会合の会場としても多く使われたようであり、初期の学士会も会場所に萬代軒を選んでいる。

萬代軒で東京合唱協会のメンバーはどのように過ごしていたのだろうか。スコットが会誌に残した戯画の端々から、ある金曜日の晩の様子を再現してみよう。

夜8時ちょうどに、萬代軒の三階に会員が集まると、まずはエッケルトに報酬が支払われる。会計が済んでからが歌の時間だった。エッケルトはヴァイオリンを弾きながら指揮し、会員は愛唱歌集 *Regensburger Liederkrantz* のパート譜を見ながら歌う。一しぎり歌った後は、酒を飲み、葉巻を煙らせ、歓談して時を過ごす。というのが建前だったが、実際は少なからぬメンバーが、歌の時間にも葉巻を吸い、盃を空けていたようだ。

(Ka.S.)

Panel TGV-3b

『東京合唱協会の珍談さまざま』1881年2月号

#### 【画像1】

1881年2月5日には海軍軍楽隊員25名は萬代軒における東京合唱協会の催し物に雇われた。

#### 【画像2】

開いているのはオレンドルフという英語の教科書。

#### 【画像3】

ゼン(左)とランゲ(右)。

#### 【画像4】

葉巻をくわえてヴァイオリンを弾くエッケルト。

#### 【画像5】

トレースター(左)とR・スコット(右)。

Panel TGV-4

### 東京合唱協会とエッケルト

エッケルトは指揮者として協会に雇われている立場であって正式な会員ではなかったが(パネル TGV-1 参照)、少なからず会誌に登場している。そこに描かれたエッケルトの姿から、協会とエッケルトとの関係を垣間見ることができる。

1881年1月号からは、前年4月に会員から誕生日プレゼントとして時計を贈られていたことが分かる。同2月号(パネル TGV-3b 参照)には、葉巻を吸いながらヴァイオリンを弾くエッケルトが描かれている。他の号でも、葉巻をくわえてヴァイオリンを持つのがエッケルトのスタイルである。

1884年2月号では、エッケルトが会員のC・ヤウス、F・エーレルトとともに前年12月に日本政府から叙勲されたことが祝われている。ヤウスが勲五等で、勲六等のエッケルトとエーレルトよりも階級は高かったのだが、指揮者のエッケルトに敬意を表してか、会誌ではエッケルトが三人の中央に描かれている。

(Ka.S.)

(ケース内)

### 東京合唱協会が出演した演奏会の批評

#### 『日本週刊便り』1880年6月19日

先週土曜の午後、流行に敏感な多くの聴衆が上野につめかけた。生憎の曇り空だったが、幸運にも張り出した雲から雨粒が落ちてくることはなく、横浜から駆けつけた人も来たことを後悔せずに済んだ。この日は海軍軍楽隊による器楽曲と、その合間にはさまれた東京合唱協会による無伴奏合唱曲 part-songs のコンサートが開かれた。指揮はすべてエッケルト氏であった。

軍楽隊の演奏は非の打ち所のないものだった。メンツェルの「演奏会ポルカ」には前楽長フェントン氏と現楽長エッケルト氏の優れた指導の成果があらわれていた(前任者の尽力が現任者において実ったと言えよう)。曲中の2人の軍楽隊員によるソロはとともによく、彼らがヨーロッパやアメリカの最上の奏者に匹敵することを証明するものだった。プログラム中でこの曲の演奏が最高の出来だったことは疑いない。

ツイコフの「幻想曲」はテンポが少し遅すぎたし、作曲者の意図通りであれば別働隊が演奏すべきエコーを、バンドの中の奏者が演奏したために、魅力が損なわれてしまった。シュピントラーの「軽騎兵の進撃」も情熱と気迫を欠いたものであった。何にもまして悪かったのは例の「青きドナウ」のワルツで、この演奏会の他の演奏が優れていたことに比べて、はるかにだらしのない演奏だった。

A large and fashionable audience assembled at Uyeno, last Saturday afternoon. The weather was dull but fortunately the overhauling clouds withheld their showers, and the numerous visitors from Yokohama had no cause to regret their excursion. The programme consisted of a selection of instrumental music by the Naval Band, interspersed with part-songs by the Tokio Gesang-Verein, all under the direction of Mr. Eckert. We cannot praise too highly the performance of the band: the excellent training by the late bandmaster, Mr. Fenton, and by the present one Mr. Eckert, (who has in a great measure reaped the fruits of his predecessor's labors) were most apparent in the Concert-Polka of Menzel. In this number the solo performances by two members of the corps were of such excellence, as to shew them worthy rivals of all but the very best European or American players. This was undoubtedly the best-performed piece in the whole selection. Zikoff's Fantaisie was taken too slowly and lost much of its charm by the "echo" being played in the midst of the principal band, instead of detaching some players for the purpose as intended by the composer. Spindler's Husaren-ritt, also lacked a little fire and spirit, while the old "Blue Danube" waltz was the worst of all; being played in a slovenly style which formed a marked contrast to the otherwise excellent work performed. The Gesang-Verein—a society of German amateurs—kindly contributed some charming part-songs by Spöhr, Mendelssohn, etc. These gentlemen were at a great disadvantage with respect to the acoustic properties of the auditorium. The open air is not always favorable to vocalisation, especially when the only sound-board consists of a slight trellis-work, dotted here and there with vine-leaves. We hope to hear the society ere long under more favorable auspices, for even the verandah, to which the members adjourned, is not so good a locale as a hall or concert-room. Our best thanks are due to all concerned for affording us so pleasant a relief from the "weary round of life;" and we are above all things happy to learn that the very excellent charitable institutions of Tokio will benefit to the extent of some seven hundred yen. Could not the committee repeat the experiment in Yokohama?

ドイツ人のアマチュア・サークルである東京合唱協会は、シュペール〔シュポーアの誤り〕、メンデルスゾーンなどによる、素敵な無伴奏合唱曲を披露した。会場の音響が悪く、彼らは大変に不利であった。声楽にとって野外は必ずしも好都合ではない。ブドウのツタが絡まっているような格子細工の、わずかばかりの反響板しかないときは、特にそうである。もっと好条件の催しで彼らの歌を聴いてみたいものだ。後で彼らはヴェランダに移動したが、そこもコンサート・ホールには及ばなかった。

「退屈な日常」に楽しい息抜きを提供してくれた関係諸氏に深く感謝する。なお東京の慈善団体は、今回のコンサートで700円もの収益をあげたこと、何よりうれしく思う。委員の皆さん、横浜でもやってみませんか?

〔訳〕 (Ke.S.)

(ケース内)

#### 東京合唱協会の総会、1885年1月31日

会員クルト・ネットに宛てた葉書には「東京合唱協会。一八八五年一月三十一日土曜日。定例総会兼臨時総会。定款変更を提案。理事会」と書かれている。この「提案変更」は果たしてどの内容だったのだろうか。雑誌『東京合唱協会の珍談さまざま』の現存する最終号が一八八五年一月であり、すでに一八八四年から合唱協会の調子が決して良くなかったため、この機会に解散になった可能性も考えられる。

(H.G.)

## 【東京】

Panel Tok-1

### 明治期の音楽関係外国人教師

明治期には、音楽分野でも異なる音楽経歴をもつ各国の外国人教師が活躍した。薩摩藩軍楽伝習生と海軍軍楽隊を指導したイギリス人ジョン・ウィリアム・フェントン (1831~1890)、その後任で海軍軍楽隊を教育したドイツ人エッケルトとグスタフ・アルペ、陸軍軍楽隊を教育したフランス人ギュスターブ・シャルル・ダグロン (1845~1898) とシャルル・ルルー (1851~1926)、文部省音楽取調掛と東京音楽学校に勤務したアメリカ人ルーサー・ホワイトティング・メーソン (1818~1896)、オランダ人ギヨーム・ソーヴレー (1843~1902)、オーストリア人ルドルフ・ディットリヒ (1861~1919) などである。

このうち、初代の《君が代》および現行の《君が代》の成立に関与したフェントンとエッケルトは、宮中での音楽を掌る式部寮雅楽課 (のちの宮内省式部職楽部) にも勤務した。なかでもエッケルトは、短期間ながら音楽取調掛・陸軍軍楽隊にも兼務し、結果的に、明治期の日本で西洋音楽を行っていたすべての国家機関に関わったという稀有な人物であった。

(Y.T.)

(ケース内)

### 鹿鳴館時代

鹿鳴館は、迎賓館として1883年に開館した。設計者はお雇い外国人ジョサイア・コンドル Josiah Conder (1852~1902、イギリス) で、現在の帝国ホテルの隣接地にあった。

鹿鳴館では、国賓の接待のほか、欧米人を招いた舞踏会が連夜のように開かれ、明治政府が推し進める欧化政策の舞台となった。鹿鳴館を中心に展開された外交は、「鹿鳴館外交」と呼ばれる。その推進者であった井上馨が1887年に外務大臣を辞任すると、それを期に鹿鳴館時代は終わりを迎えた (建物自体は1940年に取り壊された)。

(Ke.S.)

Panel Tok-2

### 薩摩藩による軍楽伝習

1869 (明治2) 年10月、横浜の妙香寺で薩摩藩の伝習生32名による日本最初の軍楽伝習が始まった。薩摩藩は薩英戦争後にイギリス式軍制を採用し、太鼓・笛・ラッパからなる鼓隊 (鼓笛隊) を有していたが、より本格的な軍楽隊をもつべく、横浜に駐屯中の英国陸軍第10連隊軍楽長フェントンに指導を依頼した。彼らは、写真入り隔週刊英字新聞『ザ・ファー・イースト』1870年7月16日号に「サツマ・バンド」として紹介され、ロンドンに発注した楽器一式の到着まで五線譜の読み書きと鼓隊の訓練を受けていると報じられた。

サツマ・バンドの時代に、天皇および皇室に対する礼式曲《君が代》 (初代) がフェントンによって作られた。また、サツマ・バンドを母体に、1871 (明治4) 年8月兵部省軍楽隊が発足し、10月には陸・海軍軍楽隊が分立発足する。1870年に陸軍はフラン

ス式、海軍はイギリス式と決定されていたために、サツマ・バンド出身者の大半は海軍軍楽隊に所属し、フェントンも海軍省の雇教師となった。

(Y.T.)

Panel Tok-3

#### 海軍軍楽隊の初代教師フェントン

J.W.フェントン (1831~1890) は、英国陸軍兵士の父の勤務地であったアイルランドのキンセイルに生まれ、1842年陸軍第25連隊に入隊して鼓手となり、1854年軍曹に昇任、1863年には1857年創設の英国陸軍軍楽学校で学び、1864年第10連隊の軍楽長となる。

1868年、所属連隊とともにケープ植民地から来日し、横浜に駐屯した。『ザ・ファー・イースト』1871年7月1日号には、横浜山手公園のバンドスタンドに集う英国陸軍第10連隊軍楽隊の写真が掲載されている。1869年から薩摩藩の軍楽伝習を指導したことが機縁となり、1871年英国陸軍を退役して日本の兵部省軍楽隊（陸・海軍部分立後は海軍軍楽隊）の雇教師となった。フェントンが作った吹奏楽用の天皇礼式《君が代》は、1880年に現行曲に改定されるまで使用された。1876年4月より海軍省と式部寮の共雇となり、宮中での西洋音楽演奏にも貢献したが、1877年3月満期解雇となり、夫人の故郷であるアメリカに渡った。

(Y.T.)

(ケース内)

Panel Tok-3b

#### エッケルトの演奏会評

当時の新聞に掲載された、エッケルト指揮による演奏会評を年代順に追って読んでいくと、彼への評価の推移が見て取れる。

1880年の評では、前任者フェントンの成果しか評しない節もあり、エッケルトの指揮は勇壮な曲にもかかわらずテンポが遅い、腕を大きく振り過ぎるなど、かなりの不評を買っていた。しかし2年後、1882年のモースの評では、4年間の進歩に感銘をうけたとあり、エッケルト来日前の「4年前の陸軍軍楽隊の演奏があまりにひどかった」とある。これらの評から、恐らくエッケルトは来日前に指揮を経験する機会がなかったため、来日直後はなかなかうまく振れず、その後2年の間に、かなりのレベルまで指揮を習得したのではないかと推測できる。

82年以降は、いずれの演奏会評でも比較的好評を得ており、それは韓国時代まで続く。1908年には「長短緩急の妙趣」とまで評され、来日初期に不評を買っていたテンポ感が見事な進歩を遂げた様子も窺える。

(R.M.)

Panel Tok-4

#### 陸軍軍楽隊の初代教師ダグロン

G.Ch.ダグロン (1845~1898) は、1872年5月、明治政府が招いた第二次フランス軍事顧問団のラッパ教官として来日した（本国では4等楽手）。フランス式のラッパ伝習は、徳川幕府の招聘で幕末の1867年に来日した第一次フランス軍事顧問団でも行われており、早々に軌道に乗ったため、ダグロンはまだ指導者のいなかった陸軍軍楽隊（吹奏楽）の

指導も依頼され、1882年まで6回の履継を経て約10年間その任にあたった。

ダグロン自身は指物職人の出身で、正規の音楽教育は受けていなかった。そのため、クラリネットやサクソフォーンなどの木管楽器は来日中のオーストリア人アンジェルから（1873年から1年間）、トロンボーンやバスなどの金管楽器は追加派遣されたフランス人一等楽手ブリュナッシュユから（1874年から1年間）補佐を受けながら指導にあたり、陸軍軍楽隊を着実に成長させた。1879年には勲6等単光旭日章を贈られた。

(Y.T.)

Panel Tok-5

#### 文部省音楽取調掛の初代外国人教師メーソン

1879（明治12）年10月、文部省に音楽取調掛が設置され、伊澤修二が長となり、①東西二洋の音楽を折衷すること、②将来国楽を興すべき人物を養成すること、③諸学校に唱歌を実施すること、を方針に掲げた。伊澤は米国留学時代に指導を受けたボストンの高名な音楽教育家 L.W.メーソン（1818~1896）を雇教師として招聘し、メーソンは1880年3月に来日して、1882年まで最初の唱歌教材『小学唱歌集』の編纂や、東京師範学校附属小学校、東京女子師範学校および同校附属小学校などでの唱歌教授にあたった。また、音楽取調掛に勤務する山田流箏曲家の山勢松韻や式部寮の雅楽家たちとも交流した。

しかし、『小学唱歌集』初編刊行後、休暇帰国中の1882年にメーソンは契約満期をもって解雇となる。この背景に、メーソンの専門と音楽取調掛の仕事内容との齟齬の他、メーソンがキリスト教の布教活動にも関与していた点もあったのではないかと指摘されている。

(Y.T.)

Panel Tok-6

#### 文部省音楽取調掛でのエッケルト

エッケルトが音楽取調掛に勤務したのは、1883年2月~1886年3月までの約3年間である。エッケルトに托されたのは管弦楽教授と楽曲の調和（和声付け、編曲）であった。エッケルトは毎週火木の午後、週4時間勤務し、楽曲の調和に関係したものでは、複音唱歌を含む『小学唱歌集』第三編の編纂に協力した他、当時は唱歌の伴奏楽器の一つに想定されていた箏の伴奏譜の作成、西洋曲の二面ないし三面の箏合奏への編曲などを行ったが、それらの原稿が東京藝術大学附属図書館に残されている。

エッケルトの兼務終了後、音楽取調掛は後任にオランダ人のギョーム・ソーヴレー（1843~1902）を雇い入れた。エッケルトは1887年4月から海軍軍楽隊と宮内省式部職を兼務する。

(Y.T.)

Panel Tok-7

#### 海軍軍楽隊でのエッケルト

エッケルトは1879年3月横浜に到着し、海軍省と2年間の契約を結び、フェントン解雇から丸2年教師不在で技術低下に陥っていた海軍軍楽隊を厳しく鍛え直した。ドイツ人教師アンナ・レールが雇われ、選抜した隊員10名へのピアノ伝習も開始された。また、1880~1889年には、軍楽隊員の技芸加

俸制度（年2回の実技試験により加俸を決定）が採用された。こうした措置が実り、海軍軍楽隊の演奏水準は向上し、公務のほか依頼演奏も数多くこなした。1890年、海軍軍楽隊は拠点を東京から横須賀へと移転する。

エッケルトは1889年3月海軍軍楽隊を満期解雇となり、後任には1889年4月から1892年までG.アルペが就任した。エッケルトは1895年から再び海軍軍楽隊（横須賀海兵団軍楽隊）を兼務し、吉本光蔵らによる『海軍軍楽学理的教科書』編纂の顧問も務めた。1899年3月、宮内省と海軍軍楽隊ともに満期解雇となり、20年ぶりにドイツに帰国する。（Y.T.）

#### Panel Tok-8

##### 宮内省式部職でのエッケルト

エッケルトは、1887年4月から海軍軍楽隊と宮内省式部職を兼務し、1889年4月からは式部職の専任教師となり、西洋音楽を兼修する雅楽家たちを1899年3月まで10年間指導した。ただし、エッケルトと式部職の雅楽家との接触は、1880年、管弦楽をめざして彼らが結成した洋楽協会の依頼でヴァイオリンを教え始め、さらに現行の《君が代》と将官礼式（General Salute）《海ゆかば》の編曲を担当した時から始まっていた。また1882年以後は、宮中で西洋音楽が演奏される重要な機会であった天長節宴会（11月3日）のために、毎年臨時に指導を依頼されていた。

しかし、式部職の雅楽家たちとエッケルトとの良好な関係は、1897年に起きた雅楽と西洋音楽の分離／兼修をめぐる紛擾により悪化し、1899年の満期解雇、離日に至ったと推測される。式部職では、その後もドブラヴィッチ、コメリ、ハーリッヒ＝シュナイダーら外国人教師を雇い続けた。

（Y.T.）

#### Panel Tok-9

##### 陸軍軍楽隊のレベルを向上させたルルー

Ch.E.G.ルルー（1851～1926）は、パリに生まれ、1869年12月パリ音楽院に入学し、マルモンテルについてピアノを学んだ。1872年12月召集を受け、フランス陸軍歩兵第62連隊に配属され音楽兵となる。1875年歩兵第78連隊に転任、副軍楽隊長を経て、1879年軍楽隊長となる。1884年第三次フランス軍事顧問団の一員として来日、陸軍軍楽隊を1889年の帰国まで5年間指導した。この間、ルルーは教育軍楽隊を編成して教育改革を行い、そこから1886年に近衛軍楽隊を、1888年には大阪軍楽隊と軍楽基本隊を編成した。ソルフェージュ教育や、教則本を用いた教育を導入し、陸軍軍楽隊のレベルを格段に向上させた。

ルルーの滞日は鹿鳴館時代（パネル Tok-1 下のケース参照）に重なり、陸軍軍楽隊は海軍軍楽隊とともに舞踏会の伴奏も務めた。ルルーの作品には軍歌《抜刀隊》《扶桑歌》やその旋律を用いた《陸軍分列行進曲》、日本や中国の歌によるピアノ作品等がある。1910年、雅楽研究書『日本古典音楽』を出版、勲4等瑞宝章を受章。

（Y.T.）

#### Panel Tok-10

##### エッケルトと吉本光蔵

吉本光蔵（1863～1907）は、第1回軍楽通学生に採用され、1878年12月に15歳で海軍軍楽隊に入隊した。エッケルト着任はその3か月後である。瀬戸口藤吉（1868～1941）によると、吉本はエッケルトから囑望されて早くから和声学や作曲編曲などを教育されたといい、エッケルトの家族とも親しかった。吉本は、1890年に《越後獅子》や《鞠唄》などの三味線音楽の五線譜を海軍省蔵版として出版した。

エッケルト一家が帰国した直後の1899年5月、吉本は海軍軍楽隊初のドイツ留学を命じられ、1900年10月にベルリン高等音楽院に軍楽学生として入学した。ベルリンでは、エッケルトの兄ヴェンツェルや息子フランツとも交わり、1900年12月にソウルに向けて出発するエッケルトをベルリンで見送った。1902年6月帰国、1904～1905年日露戦争に従軍し、1905年8月に始まった日比谷公園奏楽の指揮も行った。

（Y.T.）

##### 【バート・ゾーデン】

#### Panel Soo-1

##### バート・ゾーデンにおけるフランツ・エッケルト

エッケルトは日本から帰国し、しばらく療養のためシレジアの故郷近くの保養地で休養後、ドイツで新しい職を探した。そこで何を狙っていたのか分からないが、とにかく彼はバート・ゾーデンというゲッティンゲンの近くにある保養地専属楽隊長のポストに応募した。バート・ゾーデンの市議会は1899年12月8日に複数の応募者の中からエッケルトを選任した。エッケルトの契約条件、着任日、期間などについては現在のところ確認できていないが、前任と後任の指揮者の在職期間を見れば、保養地楽隊が主に保養季節（5月～9月）に演奏していたにも拘らず一シーズンだけの採用ではなかったと考えられる。とにかくエッケルトは1900年5月下旬から9月半ばまで毎朝8時から賛美歌を指揮し、それに加えて毎週11～13回の演奏会を開いていたと「ゾーデン保養地情報紙」から読み取れる。水曜日のみは演奏の義務がなかった。

（H.G.）

#### Panel Soo-2

##### 塩産地・保養地バート・ゾーデン

ヴァラ川の左右にある今日のバート・ゾーデン＝アレンドルフは（現）ドイツのほとんど中央にあり、旧東西両独国境のすぐ西側に位置する。街は二つの地区に分かれる。ヴァラ川の西側には、遅くとも8世紀から塩産業に利用されてきた泉を中心とする（バート）ゾーデンがある。ゾーデンは1900年には712人の人口（その内22人カトリック）が住んでおり、同年に2211人の入湯客を迎えていた。東側には当時2807人の人口（その内76人カトリック）を持つアレンドルフがある。ゾーデンは元来主に塩産業を中心とし民家が少なく、裕福な家族はアレンドルフに住んでいた。アレンドルフは1218年以来都市権を持ち、今日まで残っている市壁によって守

られていた。1808年から1929年までゾーデンとアレンドルフはそれぞれ自立した都市であった。古くから私設の入浴施設があったゾーデンは1881年から温泉療法や吸入治療のための公立保養地となった。(H.G.)

#### Panel Soo-2a

##### バート・ゾーデンとソウルの八角亭

バート・ゾーデンの公園にあった奏楽用八角亭でエッケルトは1900年には毎日演奏していた。1901年にソウルに来て後、1902年にパゴダ公園に彼の軍楽隊の演奏のために同様の八角亭が建てられた。(H.G.)

#### Panel Soo-3

##### バート・ゾーデンの音楽

ゾーデンが1881年に公立保養地になって以来、市は裕福な入湯客のために入浴場やクアハウスのような施設のみならず娯楽の整備にも力を入れた。その中では演奏会が最優先の課題であった。他にはハイキング・ツアー、遊覧、周辺の演奏会への参観などが提供された。

初期には主に隣村オルフェローデの音楽家たちが演奏会を担当していた。そこには長年の音楽伝統があったが、ゾーデンの需要によってさらに盛んになったようで、音楽隊は1880年には6～8人、1886年10人、1891年12人編成でゾーデンに出張していた。しかし彼らは「非常に頻繁に」来てはもやがてそれでも十分ではなくなり、1890年には毎日演奏する専属の楽隊が創立された。エッケルトが1900年に指揮したのはこの楽隊である。文献によってこの楽隊は「20人程度」、または「最大で16人」の編成であったとされている。1901年以後の絵葉書には指揮者を含めて16人の楽隊員が写っている。(H.G.)

## 【ソウル】

#### Panel Kor-0

##### エッケルトの韓国時代に関わる展示について

エッケルトの韓国時代は彼の人生のほぼ四分の一を占め、彼のもっとも成熟した時代でもあったし、それと同時に政治的な状況と彼自身の健康状態は徐々に下降する時代でもあった。しかし日本では韓国の洋楽史一般について、そしてその中でエッケルトが果たした役割について、まだ紹介されていない部分も多くある。したがってこの展覧会ではエッケルトの韓国時代に十分なスペースを取り、韓国に関わる展示物を四つの部分に分けて展示することにした。

ここから二つのコーナーと13枚のパネルを含む第一部ではエッケルト時代の韓国と韓国時代のエッケルトの一般的な紹介をする。

次に90度右に曲がったところの壁では第二部として、エッケルトの韓国時代の代表作である《大韓帝国愛国歌》とその成立過程と受容とについて語る。

さらに90度右に曲がったところの長い壁では第三部として、1922年(大正11年)に韓国の時事週報『東明』に発表された、韓国の軍楽隊の歴史について書かれた詳しい記事を注釈付の全訳で紹介する。

最後に、展示室の出口にはエッケルトの死と墓碑に関する資料を展示する。

#### Panel Kor-1

##### エッケルトが着任した頃の大韓帝国

19世紀半ばの朝鮮は、開国を迫る欧米諸国や日本、清からの外圧に苛まれた。国内的には、外交をめぐる王朝内部での対立や、封建的な支配体制に抵抗する民族運動が続発していた。1894年の甲午農民戦争をめくり、鎮圧に出兵した日本と清の対立が強まり、同年、日清戦争に至る。日清戦争を制した日本は、1895年4月の日清講和条約(下関条約)で、清と朝鮮の宗属関係を廃止させ、日本の支配を強化した。

日清講和条約に対し、ロシア、フランス、ドイツは、いわゆる三国干渉で日本を牽制した。特に日本とロシアとの対立は深まり、親露的な朝鮮王朝の閔妃が暗殺される事件が起きるなど、内憂外患は募るばかりであった。

朝鮮王朝は、自主独立を示そうと、1897年に国号を「大韓」と改め年号を「光武」とし、国王高宗は皇帝に即位した。

エッケルトは大韓帝国に1901年2月に到着し、5月から宮廷軍楽隊の指導を始める。その後、高宗皇帝の御前演奏を度々行った。(K.F.)

#### Panel Kor-2

##### エッケルトの契約と雇用条件

1901年4月、契約書「訂立合同書」が締結された。漢文(ハングルを含む)とドイツ語でそれぞれ作成され、大韓帝国軍部、外部、ドイツ公館、エッケルトが1部ずつ保管した。

大韓帝国の軍部官房長・韓鎮昌と外部交渉局長・李應翼の署名付きで、エッケルトの雇用に関する詳細が記されている。光武6年(1902)4月5日の日付がある。

第1条では、エッケルトの聘用期間が光武5年(1901)2月1日から3年間とされている。第2条から第6条にかけては、毎月の給与が300元、住居費等が30元、ドイツから漢城までの渡航費として月給2ヶ月分と600元が支給されることなどが書かれている。

ドイツ語版では、日本の硬貨または紙幣による「円」で支払うと記され、月給は300円となっている。参考までに、この頃の東京では、公立小学校教員の初任給が月額10～13円ほどであった。米10kgの平均価格が1円10銭6厘であった。エッケルトの報酬が高額であったことがわかる。(K.F.)

#### Panel Kor-2a

##### エッケルトと軍楽隊員(1902年5月以前)

この写真は韓国のドイツ金鉞監督レイ・パウアーが弟カールに送ったものである。1903年3月27日堂嶋から送った手紙にはエッケルトについて以下のように書かれている。

ソウルにはドイツ人の音楽教師も活躍している。彼はプロイセンのコンサートマスターまたはカペルマイスター、軍人であり、こちらでは多分30人ぐらいの兵士を持っている。彼らにはまずは国歌、そ

して行進曲などを教えなければならない。楽器は全てドイツ製だ。エッケルト（ママ）氏は勿論韓国語を一言も分からないけど、すでにかなり進歩を遂げている。韓国の皇帝のために国歌を作曲し、それによって勲章を貰った。ちなみにその音楽は韓国人に親しまれ、宮廷にも彼は楽隊とともによく歓迎されている。

(H.G.)

Panel Kor-3

### 大韓帝国をめぐる日露の対立と外交の場

1897年の大韓帝国の成立にはロシアの支援があった。朝鮮での利権に関わって日露の対立は深まっていた。日本はイギリスと日英同盟を結んでロシアの勢力拡大を阻止しようとした。大韓帝国は、自国をめぐる列強の勢力の拮抗によって逆に独立を保とうとし、1900年以降は中立を標榜した。

満州・朝鮮での日露の覇権争いは、ついに1904年～05年の日露戦争に至る。日本は即座に漢城（現在のソウル）を占拠すると、次々に韓国の保護国化にむけ支配を強め、1904年8月には第一次日韓協約を締結した。

開戦後まもない1904年3月24日には、日本大使館で大使の伊藤博文を囲む夜会が開かれている。韓国宮廷や政府要人、韓国駐在の各国外交官ら150人が招かれた。同27日付の『東京朝日新聞』<sup>46</sup>では「宴會中は始終朝鮮音楽隊の奏樂もあり宴 酣 にして舞踏數番孰れも十分な歡を盡し……」と記されている。エッケルトと宮廷軍楽隊は外交の最前線で存在感を示していたのである。

(K.F.)

Panel Kor-4

### パゴダ公園での演奏

1902年6月、宮廷軍楽隊は漢城（現在のソウル）中心部パゴダ公園の西側に新築された洋館に移転した。同公園内にある八角亭では、毎週木曜午前10時に一般市民向けに野外での公開演奏が行われるようになった。

パゴダ公園は、もとは李氏朝鮮の護寺である大円覚寺の跡地で、国宝級の仏塔や碑石が並び、当時から人々の憩いの場であった。1919年3月の「三・一独立運動」発祥の地としても知られ、歴史的にも特別な場所である。

『音楽界』1908年10月号に掲載された記事「韓国の洋楽」で、日本人記者の藤野奏風は、野外演奏の聴衆について、次の様に記している。「當日の聴衆は韓人七分歐米人二分日本人一分の割合なるが京城には歐米人の數に三十倍なる日本人が居住しながら斯く聴者の少きは如何なる理由なるか、蓋し日本人の音楽趣味低くしてワザワザ聴きに來る程の熱心家に乏しき故ならん」と記した。韓国人や欧米人の聴衆に比べて、日本人の関心の低さを指摘している。

(K.F.)

Panel Kor-5

### パゴダ公園でのエッケルト指揮の様子

パゴダ公園での野外演奏を指揮したエッケルトの様子を、藤野奏風が『音楽界』1908年10月号の「韓国の洋楽」という記事で紹介している。藤野はエッ

ケルト指揮による帝室音楽隊（1907年9月に宮廷軍楽隊から改称）の演奏について高く評価した。エッケルトはこのとき56歳であった。

記者は去る十日午後五時入園し見たるが樂員は韓人五十名の吹奏隊にして樂長獨逸人エツケルト氏指揮杖を執れり、氏は曾て日本の海軍軍楽隊の教師なりしが解備の後韓國に聘せられ今尚樂長たり、年齢六十歳以上ならん、寄る年波に鬢毛白く腰は稍屈みたれど元氣頗る旺盛にして二十年前我が海軍に在りしときの面影は尚存せり、奏樂曲目は歌劇の拔萃曲にして長短緩急の妙趣洋人ならで斯く指揮し得べしとは思はず、演奏數番の後指揮を樂長に譲りて氏は立去れり、是より代理の樂長の指揮にて方舞曲數番を演し最後に韓國の國歌を奏せり、概して演奏は記者の耳には上等の出來と聞へたり……韓人樂隊萬歳と云ふべし

(K.F.)

Panel Kor-6

### パゴダ公園での韓日音楽隊の比較

パゴダ公園では、1906年に創設され朝鮮に駐留した日本の朝鮮駐劄軍楽隊も野外演奏を行っていた。藤野奏風は『音楽界』1908年10月号の記事「韓国の洋楽」で、その演奏についてもふれている。

楽隊は半隊にて樂長工藤氏は出場せず、曲目は五番にして越後獅子とか軍用砲とか何れも卑近のものなりき、顧みて聴衆を一瞥すれば韓人六分日本人四分の割合にて日本人には紳士らしきもの一人も見えず、按するに日本の紳士なるもの音楽と云ふものを蔑視し樂隊を聴く愚物なしと云ふ如き態度の人多ければ鼻下に八字髭を有する手合は斯かる場所に停立せざるものと見ゆ尤も奏樂曲目も野卑にして堂々たる紳士をチャームする程の力も無く

朝鮮駐劄軍楽隊樂長の工藤貞次は、陸軍戸山学校軍楽隊の初代隊長を務めたこともある軍楽界の重鎮であった。藤野の記事では、工藤が指揮をしなかったこと、楽隊の規模、演奏曲目、演奏、日本人聴衆の様子など、いずれも評価は手厳しい。

(K.F.)

Panel Kor-7

### 宮廷軍楽隊から帝室音楽隊、そして李王職洋楽隊へ—縮小・再編—

1905年11月、日本は韓国に第二次日韓協約（乙巳保護条約）への調印を強いて、韓国の外交権を掌握するなど、さらなる支配を強化した。1906年2月には統監府が置かれ、伊藤博文が統監となった。皇帝高宗はオランダのハーグで開かれた第二回万国平和会議に密使を送り、第二次日韓協約の無効を訴えようとしたが失敗した。高宗は退位を迫られ、皇太子の純宗が皇帝に即位した。1907年7月には、第三次日韓協約が締結され、完全な保護国化により、わずかに残存していた韓国の軍隊も解散させられた。

これにより1907年9月に宮廷軍楽隊は帝室音楽隊と改称され、続いて一部の軍楽隊員のみ1907年12月に掌礼院掌樂課に吸収され縮小を余儀なくされた。

さらに、1910年8月の韓国併合によって、音楽隊は李王職（李王家の家務を司る）の管轄となり、李王職洋楽隊と改編された。規模も45人編成へと縮小された。パゴダ公園での演奏は継続したが、急激に衰退していった。この過程については向かい側の壁に展示されている『東明』の記事を参照されたい。(K.F.)

Panel Kor-8

### 朝鮮の音楽の状況を日本に伝えたエッケルト

エッケルトは、朝鮮の音楽の状況について、日本に情報をもたらす窓口でもあった。

1911年1月の『音楽界』に、東京高等師範学校教諭で、音楽教育界の中心的人物のひとりであった田村虎蔵が「韓国併合と音楽教育問題」と題して寄稿している。田村は、李王職洋楽隊についてエッケルトが高く評価していたことにふれている。

由来朝鮮國民は、其頭腦は數理に適せずと傳ふるも、技藝殊に音樂に勤能なる國民なりとは、吾人屢々之を耳にせる所なり。一例を擧げて之を證せば、我國西洋音樂の開拓に功勞ありしエツケルト氏は、最早十數年來朝鮮宮廷音樂の指揮者(コンダクトル)として雇聘せられたるが其宮廷音樂の如き、樂士は勿論朝鮮人にして、其技術は我日本國に於てすら、容易に之を見ることを得ずと賞揚せらるゝ程なり。

日本では朝鮮人の音楽性を評価する言説は、植民地時代にも多くみられるが、エッケルトによる高い評価はかなり早い時期に示されたものである。(K.F.)

Panel Kor-11

### ソウルのドイツ人と西洋人

東京に比べて西洋人が甚だ少ないソウルでは、エッケルトが友好な関係を持つことができる人々は非常に限られていた。ドイツ人としては主に韓国に長年滞在した官立独語学校長ヨハン・ボリヤーン(Johann Bolljahn)、エッケルトと同じくシレジア出身の医師リヒャルト・ヴンシ(Richard Wunsch、1905年まで)とベネディクト修道会士アンドレアス・エッカルト(Andreas Eckardt、1909年から)が挙げられる。その他に1910年の併合まではドイツ帝国の外交官たちがいた。エッケルトの家族は彼らと親密な交際をしていたことが知られている。

エッケルトはフランス人聖職者の指導下にあった明洞大聖堂に通い、娘たちは三人ともそこで結婚した。しかしフランス人の聖職者たちとも、ソウルに多く滞在していた英語系の外国人たちとも、エッケルトは原則として通訳を通してしか交際できなかった。そんな彼の日常生活を支えることができたのは、さまざまな言語に通じていた娘たちである。(H.G.)

Panel Kor-12

### 山奥から来たエッケルトの私生活

エッケルトの韓国着任から1年後、家族がソウルに到着する直前の話であるが、リヒャルト・ヴンシは1902年3月3日に両親に当てた手紙で次のように述べている。

都市から高く南山が上がったところの森の中にドイツ人の音楽監督エッケルトが住んでいる。エッケルトはノイローデの田舎出身で、田舎っぽい面がある。家族が居ない寂しさで何か生き物が恋しいと思ひ、彼は小規模の養豚を始めた。その豚のうち3頭は、ある程度肥え始めた段階で次々と盗まれてしまった。そして皆と相談した結果、4頭目が盗まれる前に屠殺され、少なくともエッケルトとドイツ人教師ボリヤーンと私はそれぞれ腹の肉とハムをある程度いただけた。残念ながらソーセージもやはり最後の一瞬で盗まれてしまった。腹の肉パーティに、私は美しくふさわしい歌を歌詞した。

その翌年6月にヴンシはエッケルトの長女と仲良くなって、婚約するか迷っていた。アマーリエは

頭が良く儉約家であり、日本語、韓国語、英語、フランス語、ドイツ語がぺらぺらだ。ピアノも上手だし、ともかくいいところはたくさんある。しかし彼女は私の想像するような私の家を代表できる貴婦人には絶対にならないのだ。

このようにエッケルトの「田舎っぽさ」は最終的に娘が医師と結婚する妨げになった。(H.G.)

(ケース内)

Panel Kor-13

### 韓国でのエッケルト家

1901年韓国に着任した際、22年以前の日本着任と同様に、エッケルトはまず一人で極東に渡った。妻は1年後、22・17・16歳の息子三人をドイツに残し、25・18・14歳の娘三人を連れて来韓した。以後韓国に滞在したエッケルト家5人のもっとも重要な課題の一つは娘たちの結婚であった。

次女アナ＝イレーネは1904年12月29日にベルギーの外交官アデマール・デルコアニュと結婚した。彼は2年間韓国皇帝顧問としてソウルに滞在していた。結婚式は明洞大聖堂で行われ、父エッケルトの軍楽隊が演奏した。

直後、1905年2月7日に、長女アマーリエがエミル・マルテルと同じ場所で結婚した。フランス人の税関使と日本人女性の息子として横浜に生まれた彼は、仏語学校長としてボリヤーンと同様に韓国に長期滞在していた。この両結婚からは、ソウル在住フランス語系外国人とエッケルト家が密接に交際していたことが推測されるが、これは明洞大聖堂を介したものであろう。

三女エリーザベトは1907年12月28日にドイツの船長オットー・メンズィングと結婚した。(H.G.)

(ケース内)

### エッケルトの娘たちの写真

381頁(右)は1907年に行われた三女エリーザベトとオットー・メンズィングの結婚式の写真。一列目で花嫁の横に立っているのは結婚立会人であったボリヤーン、花婿の横には(右から)もう一人の結婚立会人であったエミル・マルテルとその妻アマーリエとその長女マリー＝ルイーゼを抱いている乳母(日本人)。2列目にはエッケルト夫妻。

380 頁下は右の写真から切り取られたもので、エッケルトの長女アマリエとその長女マリー＝ルイーズである。

(H.G.)

Panel Kor-9

### エッケルトの最晩年と死

1915年12月、エッケルトは健康上の理由により、李王職洋楽隊の指揮を、弟子で洋楽師長を務めていた白禹鏞に譲った。

朝鮮総督府の機関紙『京城日報』は、エッケルトが亡くなる直前に晩年の様子を記事にしている。

「『君が代』の作曲者 フランツ・エツケルト氏京城に病む」と題した1916年8月7日夕刊の記事で、京城在住の弁護士・工藤忠輔の談によるものである。工藤はドイツ語が堪能で音楽にも詳しくあった。

ここでは、エッケルトの「淋しい余生」が強調されている。その理由に病気で重体となっていることと、第一次世界大戦でドイツが日本の敵国となったことが挙げられている。

エッケルトは8月6日午後9時半に自宅で亡くなった。『京城日報』の翌8月8日夕刊では「『君が代』作曲者逝く」と題した記事で、死去をいち早く伝えた。

いずれの記事でも「君が代」の作曲者としてエッケルトを称え、日本との関わりを強調する内容となっている。

(K.F.)

Panel Kor-10

### エッケルトの墓碑

1916年8月6日に亡くなったエッケルトの葬儀は8月8日午前8時から明治町（現在の明洞）の仏蘭西教会堂（現在の明洞聖堂）で行われた。エッケルトの娘アマリエの回想によれば、「宛も世界大戦の最中に入り、日本は連合国の側に立つて独逸の敵であつたにも不拘、政府は公式の代表者を8月8日明治町カトリック教本山で挙行された父の葬儀に派遣し嘗ての伺候者であり『君が代』の作曲家である父に敬意を表された」という。

亡骸は漢江河畔の揚花津にある外国人墓地に埋葬され、現在も整然とした区画のなかに墓碑が立っている。ちなみにエッケルトの墓碑から数歩しか離れていない場所には、『大韓帝国愛国歌』の原曲となった歌「パラミプンダ」を最初に採譜したホーマー・ハルバートの墓碑がある。

エッケルトの妻マティルデは1920年まで朝鮮に残り、その後自身の故郷にも近く、次男が小学校の先生を務めていたシレジア州のスドル（Sudoll）に帰って、1934年にそこで亡くなった。

(K.F.)

## 作品

Panel Kom-1

### エッケルトの作曲

#### ——日本時代——

日本では《君が代》編曲、《哀の極》の作曲などで印象づけられているエッケルトだが、実は彼自身が作曲したものはさほど多くない。

日本時代における作曲は初期が比較的多く、吹奏楽伴奏ではあるが《君が代》と《ウミユカバ》（1880年）を筆頭に、《日本の歌による幻想曲》（1882年以前）、《東京記念行進曲》（1882年）、《歩兵分列行進曲》（1888年以前）、《英國々風歌集》（1890年以前）等がある。また後期では《旅順行進之曲》

（1895年）、《哀の極》（1897年）、《膠州湾行進曲》（1898年推定）等が挙げられる。作曲・演奏年月日不詳のものも多いが、例えば《奇人音楽劇》は1893年2月10日、軍楽学舎第2回新築記念祭の出し物として上演されており、少なくともそれ以前に作曲されたことがわかる。残念ながら譜面は残っていないが、エッケルトの音楽劇とは珍しい。

一方、軍楽隊に演奏させる必要があったため、吹奏楽用編曲は数多く、演奏記録が残っているものも多い。原曲のジャンルもヴァーグナーやロッシーニのオペラから、J. シュトラウスのワルツに至るまで幅広く、親しみやすい作品ばかりであった。また日本の伝統音楽の編曲にも携わっている。

(R.M.)

Panel Kom-2

### エッケルトの作曲

#### ——韓国時代——

韓国時代におけるエッケルトの代表的な作品は《大韓帝国愛国歌》であるが、恐らくそれ以外にはほとんど作曲をしなかったと考えられる。当時のドイツ領事ヴァイペルトの報告によると、1901年9月7日に行われた軍楽隊の最初の公式の演奏会で、エッケルト作曲《Koreanischer Präsentiermarsch（韓国風パレード行進曲）》が演奏されているが、ただしこの曲については、それ以上の情報は得られていない。韓国ではエッケルトの作品もしばしば演奏されたが、《大韓帝国愛国歌》以外は日本で書かれた作品ばかりであった。

とくに掌礼院音楽隊（韓国軍が解散した1907年以後エッケルトが指揮していた楽隊の名称）が行っていたパゴダ公園での演奏会記録を辿ってみると、例えばエッケルトの作品では《ポプリ》歌曲集が1908年9月30日に、また《英國々風歌集》も1908年11月5日に、それぞれ演奏記録がある。加えてエッケルト編曲作品の演奏記録も多い。ヴァーグナー、J. シュトラウス、ハイドン、シューベルト等のほか、グングルやコンツキといった同時代の東欧出身作曲家の作品の編曲も取り上げている。

(R.M.)

(ケース内)

### 警視庁所蔵楽譜について

警視庁にはエッケルトの多くの作品の筆写譜（一部自筆譜）が所蔵されているが、そのほとんどが陸

軍軍楽隊から受け継いだもので、エッケルトが陸軍戸山学校で教えていた時代に作成されたものである。楽器編成は陸軍軍楽隊の編成、つまりフランス式(サクソフォン含む)となっており、エッケルトは楽譜を書く際もフランス語の楽語、楽器名等を使用している。

(H.G.)

### 東京記念行進曲

東京芸術大学所蔵出版譜。ピアノ独奏曲。1882年作曲。

### 歩兵分列行進曲

警視庁所蔵自筆譜。マイクロフィルムは近代音楽館所蔵。最後のページに、エッケルトのサインおよび1889年8月13日と記載がある。

### 博覧会マーチ

警視庁所蔵自筆譜。マイクロフィルムは近代音楽館所蔵。作曲年不詳。1 ページ目に、タイトルおよびエッケルトのサインがある。

### ランシエー

警視庁所蔵。マイクロフィルムは近代音楽館所蔵。吹奏楽曲。作曲・演奏年月日不詳。Lanciers v. F. Eckert のサインがある。

### カドリーユ

警視庁所蔵。マイクロフィルムは近代音楽館所蔵。吹奏楽曲。曲の末尾にエッケルトのサインおよび1890年10月10日の記載がある。ちなみに警視庁所蔵の《Fest-quadrille》は作曲・演奏年月日不詳となっているが、この作品と同一作品と考えられる。

### 旅順行進之曲

警視庁所蔵。マイクロフィルムは近代音楽館所蔵。ピアノ曲譜面。1895年3月出版。なお吹奏楽曲用譜面も警視庁に所蔵がある。

### 日本の歌

エッケルトは日本固有の音楽の研究結果を「JAPANISCHE LIEDER (日本の歌)」として発表している。彼が採譜した2曲の歌には題名が付いていないが、一曲目は「いかばかり」という歌い出しで、2曲目は「はるさめに」と始まる。OAGの雑誌(第2巻(第20冊)、1881年出版)に収録。エッケルトの説明によると「後述の歌2曲のうち、前者は日本の国民学校の唱歌教育に使われ、後者は最もよく知られている民謡の一つである。」後者は確かに今日も《春雨》というタイトルでよく知られているが、前者は《冬燕居(ふゆのまどい)》という原題で、1877年11月に宮内省式部寮雅楽課の伶人によって東京女子師範学校附属幼稚園の開園式のために雅楽風に作られた二曲の歌のなかの一つである。《冬燕居》の歌詞は英語の幼稚園歌から訳されたもので、撰譜者(作曲家)は一等伶人東儀季熙である。後にこの歌の様式に倣って100曲ほどの唱歌が作られ、「保育唱歌」と呼ばれるようになった。エッケルトがこの歌を採譜し編曲した時には洋楽風の唱歌、つ

まり文部省編の『小学唱歌集』がまだ出版されていなかった。

(H.G.)

### 保育唱歌《<sup>ふゆのまどい</sup>冬燕居》の原譜

東京芸術大学所蔵の『唱歌譜』より。この『唱歌譜』は1880年に、東京女子師範学校で「保育唱歌」の編集がまだ終わっていない段階で、音楽取調掛の依頼によって作成された写本である。

(H.G.)

### 【君が代】

Panel Kim-1

#### エッケルトと日本の国歌《君が代》

1888年に出版された「大日本礼式」(その内容は現行の日本の国歌《君が代》の吹奏楽スコア)はさまざまな混乱を引き起こした。表紙にはJapanische Hymne von F. Eckert「F.エッケルトによる日本の賛歌」とあるので、エッケルトが日本の国歌を作曲したという誤った情報さえ多くの文献に見られる。ただエッケルトがすでに1881年のOAG(パネルTg1参照)学会誌の短い記事で明らかにしたように、国家的に制定された国歌が存在しないため海軍省からその作曲を依頼された。そこで幾つか候補となる旋律を要求して出してもらい、その中から一つを選定して、和声を付けて西洋楽器のためにアレンジしたと説明している。つまりこの曲の旋律は日本人の作で、エッケルトの役割は選曲、和声とオーケストレーションの三つであった。

(H.G.)

Panel Kim-2

#### 《君が代》のさまざまな楽譜

作曲から119年後の1999年、《君が代》が国旗国歌法によって日本の国歌として法律上定められたが、定められたのは旋律のみで、和声や楽器編成などについては規定されていない。旋律を選んだだけで作曲していないエッケルトの名前も、同法では言及されなかった。しかしエッケルトの最初の和声付けが今日まで影響を及ぼし、多くの楽隊はその楽譜またはそれに近い楽譜に従っている。

明治時代から《君が代》には多くの楽譜が存在していた。Scribner's Magazineの1891年6月号に掲載された楽譜は、そこで説明されているように、当時雅楽部長であった岩倉具綱が所蔵していたスコアに基づくものである。ピアノ譜の作成者は明らかにされていないが、特に詳細な強弱記号が興味深い。

また、東京芸術大学が所蔵している混声合唱団と管弦楽のスコアもエッケルトの時代にできたもので、エッケルトがその作成に関わった可能性がある。

(H.G.)

(ケース内)

#### 《君が代》の手書きのスコア

##### (管弦楽と混声合唱用)

東京芸術大学所蔵。東京音楽学校(東京芸術大学音楽学部の前身、文部省音楽取調掛の後身)で使われたと思われるが、もとのスコアにインクで書かれ

た強弱記号に加えて、それと異なる強弱記号が鉛筆で記入されている。

(H.G.)

## 【哀の極】

Panel AnK-1

### 《哀の極》

《哀の極》（陸軍では「かなしみのきわみ」、海軍では「あいのきわみ」と読んでいたようである）はエッケルトの代表作の一つであるが、1897年1月11日の英照皇太后崩御に際し、宮内省式部職がエッケルトに作曲を依頼したとされる。エッケルトは二曲で構成される吹奏楽用葬送行進曲を作曲し、曲名は有栖川宮により命名された。宮内庁書陵部所蔵の、エッケルトの勲五等進級および恩給についてはかられた際の履歴書の一つ（1899年、右）によると、エッケルトは作曲後その演奏を五つの軍楽隊に指導していたことがわかる。そのためにそれぞれの楽隊の編成に合わせた楽譜を作っていた。

1897年2月2日発柩の際に初演、続く2月7日の大喪の礼で再演された。その後も明治天皇、昭憲皇太后、大正天皇、昭和天皇各々大喪の礼にて演奏されているが、決して大喪の礼に限って使われたのではない。例えば1910年のイギリス国王エドワード7世崩御の際、日本での演奏会でも追悼としてこの葬送行進曲が演奏されている。

(H.G.)

Panel AnK-2

「ショパンの曲に似て」？

— 《哀の極》第1番、第2番 —

「（第1番の）前半はショパンの《葬送行進曲》に似て荘厳な旋律ですが、後半は穏やかで優雅。」とは、『東京新聞』1989年2月18日付に掲載された牟田隊長（当時）の感想だが（展示ケース内参照）、実際はどうか、より詳しく見てみよう。

前半だけでなく、全体的にショパンの《葬送行進曲》を参考にしたと思われる箇所が散見される。第1、2番ともに前半の付点リズムは、葬送行進曲には一般的なものであるが、後半（Trio）の旋律は、ともにショパンの《葬送行進曲》中間部にさらに酷似している。

第1番に用いられた調構成は興味深い。冒頭はへ短調で開始されるが、その後転調を繰り返して、前半は不安定ながら変へ長調で終止。二度とへ短調に戻ることなく変へ長調の後半（Trio）へ突入し、そのまま終結する。この「開かれた調構成」は、ショパンの《葬送行進曲》にはないものの彼の数々の作品に見られ、彼を象徴する手法でもあった。エッケルトのショパンへの憧憬は、むしろここから想像できるかもしれない。

(R.M.)

## 【大韓帝国愛国歌】

Panel DTA-1

大韓帝国愛国歌の作曲がエッケルトに依頼された経緯

1901年になぜ「エッケルト」が大韓帝国愛国歌の作曲者に選ばれたのだろうか。それはもちろん彼が軍楽隊の唯一の指導者として韓国に滞在していたからである。だが、そもそも彼が韓国に招かれたのは、大韓帝国愛国歌作曲のためであったという可能性も考慮しなければなるまい。

当時の在韓国ドイツ領事ヴァイペルトは以前に日本の大使館に勤めていた。エッケルトの長女アマリエの回想によると、ヴァイペルトは日本時代からエッケルトの友人であった。従ってドイツから軍楽隊の教師を招くという話になったときに、ヴァイペルトがエッケルトの日本の業績、つまり軍楽隊を育てたことと国歌を編曲したことを思い出し、エッケルトを韓国政府に推薦したと考えられるのである。

世界の国家との対等な関係を目指し、華やかな国家行事を好んだ韓国皇帝には、国歌が必要であっただろう。だからエッケルトの採用の直後に国歌作製の話が出たのは不思議なことではない。

(H.G.)

Panel DTA-2

大韓帝国愛国歌はいつ完成したのか

長女アマリエによると大韓帝国愛国歌の初演は高宗皇帝の50歳の誕生日（1901年）に行われたが、それは他の資料の情報と矛盾するため、間違いだろう。エッケルトの友人であった在韓のドイツ人医師リヒャルト・ヴンシュは、1901年末に両親に宛てた手紙で、彼が宮廷の新年パーティー（西暦）に呼ばれたことと、そこでエッケルトの「新しい韓国国歌」が皇帝に「聞かされる」予定だと書いている。この情報も他の資料で裏付けることができないが、同時代の手紙なので信頼性がより高い。またこの情報は、『大韓帝国愛国歌』が1901年の冬に作曲されたという、『東明』の記事とも矛盾しない。

この国歌の存在に関する最も古い確実な情報は、フランス音楽雑誌『Le Ménestrel』の1902年3月30日号に載っている（ケース参照）。ここに展示しているスコアは、H. アレンの年代記によれば1902年7月1日に印刷されたものである。この歌は、その年の8月15日に皇帝の命令により、韓国の最初の公式な国歌として制定された。

(H.G.)

Panel Nat-1

エッケルトが関わった二つの国歌の異なる運命

1910年の日韓併合によって禁止にされてしまった《大韓帝国愛国歌》は、植民地支配からの解放後、二度と日の目を見ることができなかった。上海臨時政府によって採択されていた安益泰（1906～1965）作曲の《愛国歌》が1948年大韓民国の国歌として歌われるようになり、北朝鮮は金元均（1917～2002）作曲の《愛国歌》を国歌として選択した。従ってエッケルトの《大韓帝国愛国歌》は韓民族の歴史の中でほとんど忘れられた存在になった。

それに対して《君が代》は日本の帝国主義の象徴として戦後のGHQ時代に一時歌唱禁止になった時もあるが、その後戦前と戦後を結ぶ国歌として歌われるようになり、さらに1999年には、国民の批判や抵抗にもかかわらず、国旗国歌法の制定で法的拘束力をもつものとして存続している。

(K.L.)

## 韓国の軍楽隊（『東明』）

Panel Dom-1

崔南善の主宰による時事週報『東明』

『東明』は1922年9月3日京城（ソウル）で創刊された一冊20頁の時事週報である。この雑誌は印刷部数2万ほどで比較的人気があったが、違ったやり方で「新朝鮮の誕生」を模索しようということになり、1923年6月3日の通巻第40号（第2巻第23号）で終刊となった。

朝鮮総督府の強圧的な植民地政策は朝鮮人の3・1独立運動以後1920年代の文化政治に変わり、『東亜日報』、『朝鮮日報』、『開闢』、『別乾坤』などのような韓国語新聞と雑誌が多く発行されるようになった。当時朝鮮の言論で一番左翼的だとして検閲の弾圧を受けていた『開闢』が1926年に廃刊となったのとは違って、『東明』は事前検閲を通さないうまま発行され、比較的自由的な意志表現が可能であった。

崔南善の主宰による『東明』の創刊意図は朝鮮学の樹立であった。『東明』では社会主義思想が紹介されるものの、民族主義的な立場からの批判的な見地が見られる。

(K.L.)

Panel Dom-2

『東明』に掲載された〈朝鮮洋楽の夢想的来歴〉について

『東明』第1巻第13号から第16号まで4回に渡って掲載された〈朝鮮洋楽の夢想的来歴〉には、どのように朝鮮唯一の西洋式軍楽隊が作られ、後で京城楽隊に縮小されたのか、二十余年の歴史が詳細に著述されている。

この記事は匿名の一記者によるものであるが、軍楽隊の成立過程とエッケルトに関する詳細な情報と説明の正確さを勘案すると、エッケルトのドイツ語通訳を経て彼の弟子となった白禹鏞が原著者である可能性が非常に高い。

この記事が提供している情報は、日本経由で知られるエッケルトに関する情報とかなり異なっている。エッケルトの出身、略歴、人柄に関する情報は、所々に見られる誤りや勘違いにもかかわらず現実的で、真実に近いようにも見える。

この記事の意図は解体の危機にあった京城楽隊を救うため読者に訴えかけることであった。こうして少数のメンバーでやっと活動を続けてきた京城楽隊は1930年に白禹鏞の没後完全に解体したのである。

(K.L.)

## 終わりに

Panel 4

あとがき

「エッケルト」という名前はまず二、三の「有名な曲」と結びついているが、その知名度は音楽史上の重要性というよりも政治・社会的な機能に基づいている。従って音楽史に関しては、エッケルトの作品よりも重要なのは、彼が独日韓の文化交流に果たした役割が重要である。それは主に教育と演奏活動である。

ここで展示した資料から何を学ぶことができるだろうか。ご覧になった皆さんがこの疑問に対して自分なりの答えを見出せば、この企画はその目的を十分に果たしたと言える。ただ、西洋音楽受容が愛国主義・軍国主義・帝国主義と深く結びついていたことはまず認識していただきたい。そして音楽研究者である私たちが今回の展示で特に強調したいのは、日本や韓国の西洋音楽文化受容においては、中央のいわゆる高級文化よりも庶民的な地方文化の方が早かったということである。エッケルトは音楽院で教育を受けた音楽家でもなく、大学で教育を受けた知識人でもなかった。その代わりに彼は実技において音楽文化のほとんどすべての分野に及ぶ多面的な経験を積んでいた。

それこそ彼の成功の秘密であろう。つまり、それにより彼は日本と韓国で次々と新しい活動領域を見つけてことができ、人生の半分以上を東アジアに過ごすことになったのである。

展覧会企画者一同

【研究分担者・協力者】

ヘルマン・ゴチェフスキ（代表・東京大学）  
藤井浩基（島根大学）  
李京紛（ソウル大学）  
関庚燦（韓国芸術総合学校）  
大角欣矢（東京藝術大学）  
酒井健太郎（昭和音楽大学）  
都賀城太郎（藤村女子高等学校）  
塚原康子（東京藝術大学）  
安田寛（元奈良教育大学）

【展覧会パネル執筆担当者】

藤井浩基（K.F.）  
ヘルマン・ゴチェフスキ（H.G.）  
李京紛（K.L.）  
松尾梨沙（R.M.）  
大角欣矢（K.O.）  
酒井健太郎（Ke.S.）  
佐藤嘉惟（Ka.S.）  
塚原康子（Y.T.）

協力：

金奎道（『東明』記事原文日本語訳）  
申政正（パネル【ソウル】韓国語訳）